

41409

教科書文庫

| |
|---------|
| 4 |
| 810 |
| 41-1936 |
| 20000 |
| 46545 |

511-1936

Kodak Gray Scale

- A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

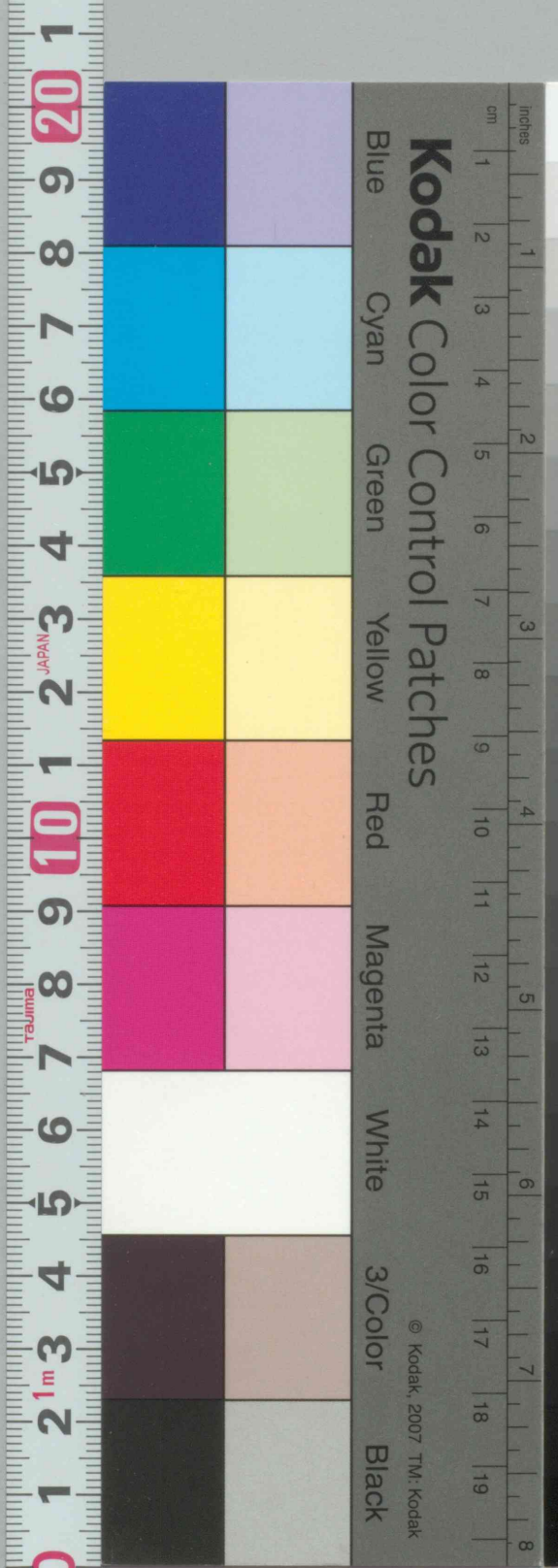


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

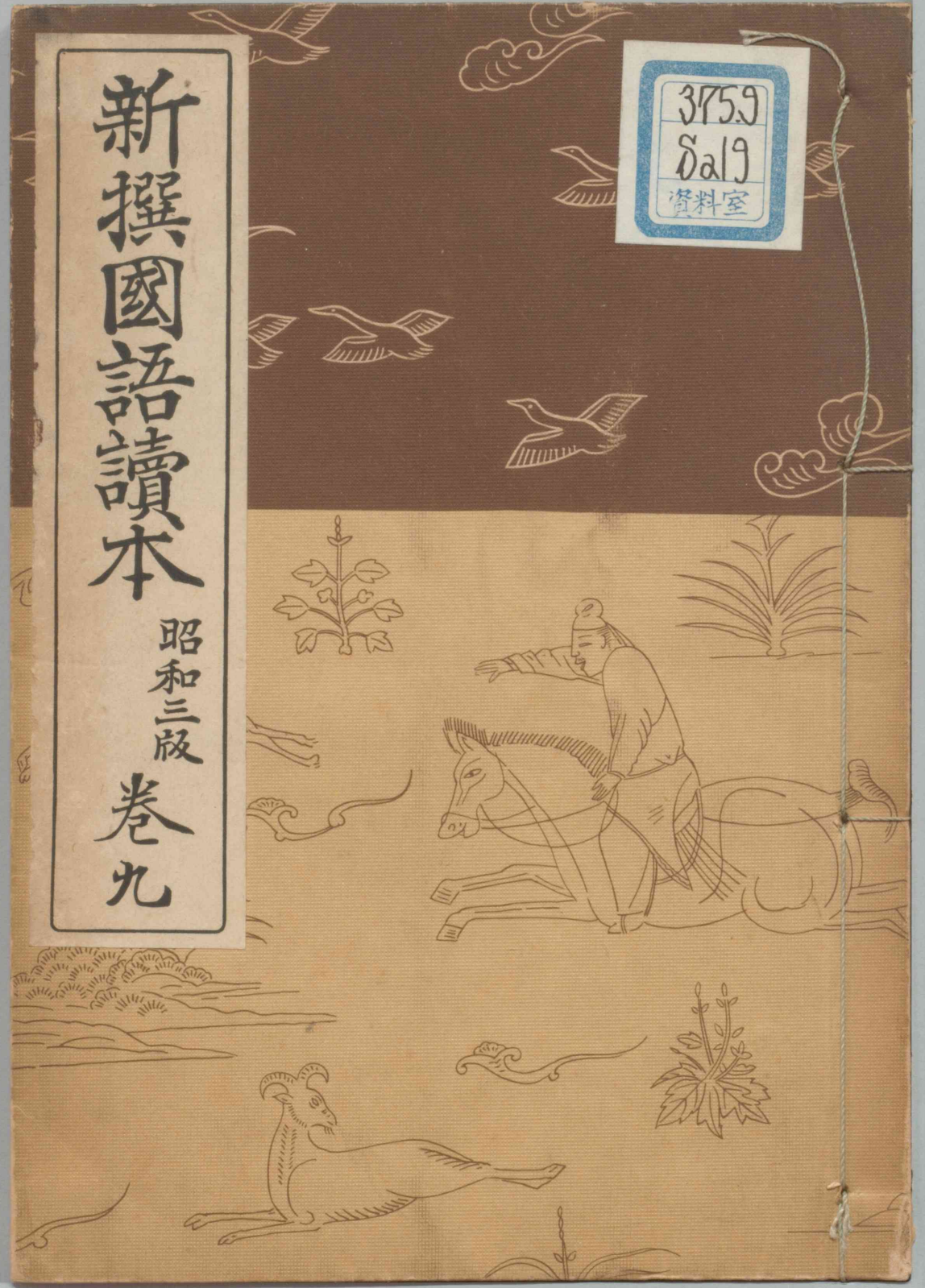


375.9
Dal9
資料室

新撰國語讀本

昭和三年版

卷九



資料室

昭和十一年一月十六日

文部省檢定濟

中學國語教科用・實業學校國語科用

新撰國語讀本

文學博士

佐々政一編

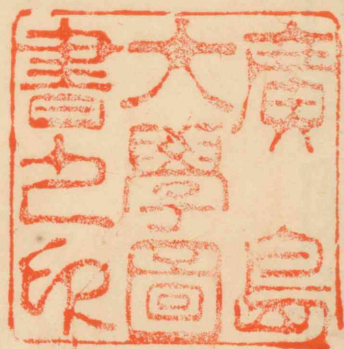
文學博士

武島又次郎
笹川種郎補
杉敏介

昭和
三版

375.9

S219



新撰國語讀本 三昭和版 卷九

目次

| | | |
|--------------|--------|----|
| 一 言葉と幼兒 | 金田一京助 | 一 |
| * をさな兒(短歌二首) | | 五 |
| 二 國語の變遷 | 吉澤義則 | 六 |
| 三 大原御幸 | (平家物語) | 一六 |
| 四 方丈の記 | 鴨長明 | 二四 |
| 五 物外の神韻 | 夏目漱石 | 三三 |
| 六 わが國の繪畫 | 藤岡東圃 | 三九 |
| 七 一人一回限 | 山本有三 | 四七 |
| 八 受發 | 幸田露伴 | 五五 |
| 九 生命と愛 | 安倍能成 | 六〇 |

| | | |
|-----------|-------|-----|
| 一〇 幻住庵の記 | 松尾芭蕉 | 空 |
| 一一 故郷 | 吉田絃二郎 | 七〇 |
| 一二 納涼 | 伴 蒿 蹊 | 七四 |
| 一三 文藝の基礎 | 厨川白村 | 七七 |
| 一四 新島守 | (増 鏡) | 八八 |
| 一五 月の前 | 上田秋成 | 九四 |
| 一六 隅田川の秋雨 | 加藤千蔭 | 一〇三 |

中古文選

| | | |
|---------|--------|-----|
| ○ 中古の文學 | 芳賀矢一 | 一〇七 |
| 一 あづま下り | (伊勢物語) | 一二七 |
| 一、みやこどり | | 一二七 |
| 二、都の友へ | | 一三〇 |
| 二 宿の小松 | 紀 貫之 | 一三三 |

| | | |
|-----------|---------|-----|
| 三 思ひよるまま | 清少納言 | 一三四 |
| 一、四季 | | 一三四 |
| 二、にくきもの | | 一三五 |
| 三、うつくしきもの | | 一三六 |
| 四、文 | | 一三六 |
| 四 心の花(和歌) | (古今和歌集) | 一三九 |
| 五 須磨の浦波 | 紫 式 部 | 一四三 |
| 六 ぬれぎぬ | (大 鏡) | 一四九 |
| 七 朗 詠 | (和漢朗詠集) | 一四六 |

金田一京助 言語
學者。文學博士。東
京帝國大學文科大
學言語學科出身。
同大學助教授・國
學院大學教授。



一 言葉と幼兒

金田一京助



金田一京助

人間が言葉を創造して、互にその心を觸合はして以來、これに
由つて、人間は自然界のも一つ奥へ、耳にも止らず手にもさへな
い共同の意識の世界を作り上げて、それを共同に持合つて今日
に及んだ。これこそ、人間のみの關與
する内面文化の領土である。

勿論、言葉そのものも、かうした文
化の上の一つの機構に外ならない。
幾度となく繰返された經驗に由つ
て、それぞれの音聲觀念と、それぞれの事物觀念との聯合が、人間
の腦裏にそれぞれの結合形を成立させて來たのである。それが

言葉である。この結合様式は、時代から時代へ傳承され、遠い末の世まで人人に護り育てられて行くのである。

我我が耳に聞くのは、ただ口を動かして、これを運用する、その刹那に於てであつて、それは已に言葉そのものではなくして、ただ言葉の「用」の一つの姿——音聲——に過ぎない。

我我が目に見ると思ふのは、已にこれを紙の上に固定させた、同じく言葉の「用」のいま一つの装——文字——に外ならない。

故に、ただ耳をもつ鶏は終に人間の言葉には交はれず、又ただ記憶をもつ犬も終に何等この世界には與からないのである。

ひとり人間の子は、幼いうちからもう違ふ。母の膝の上で乳房をいぢりながらも、大人達の會話の座にはさまつて、人人の動く口へちつとあのつぶらな目を交互に据ゑて、誰の口から自分

に解る言葉の端が出て來るかと待設けてゐる。その顔つきの利口さと、あどけなさ。或は、やがて誰かの口に一つの言葉の端を捕へ得て、突然それを幼い口に口眞似をして破顔一笑するのを見受ける時、私はよく釣込まれて、要談をもそのまま、幼兒と一緒に微笑してしまふ。

年上の方の子が、黙つて側にゐて、時時解る大人の言葉の端に、驚いた顔をしたり、目を輝かしたり、一緒に笑つたり、偶には「さうかなあ！」と横合から合槌を打つたり、「いいなあ！」と呟いたりするのを聞くと。

何時か、我が兒の、かうして、はや我我の共同意識の世界の中へ入りおほせてゐるのを心竊かに見出す時、これが微笑せずにおられようか。人の微妙な口舌の奥から湧いて來る小さな響が、大

人達の一緒に浸つてゐる、目に見えない大きな意識の曠野の中へ、児童を下り立たしめ、それが幼い足どりに、大人の脚もとを、ちよこちよこ、ちよこちよこしながら、よだち初めてゐるのは、可憐にも亦いちらしいものではあるまいか。

かうして、いやでも段段と、目に見るこの物的世界のいま一つ奥の、色も形もない無限の廣がりの世界へ我と踏込み、周囲の大人達と同じ考へ方、同じ感じ方を學んで行つて、知らず識らず、郷土の精神、祖國の感情に漬かり、或は、やがては社會の愁をも頷ち、遠い國の思想にも觸れ、古き代の哲人・亞聖の體驗にも親炙して行き、時には、網目のやうに織られて來た、ありとあるこの世の人間の意識の流に飛込んで、或はそこに問へ、或は躓き、或は惑ひ、或は嘆き、或は揉まれ、或は叩かれて、終に拔差しのならない唯一

的な己が内面生活を構成して行くであらうところの、これが抑の首途、これが抑の入團であることを考へさせられて、覺えず、我が兒の頭へ手をやりながら、私は黙つて心の中から祝福の微笑を寄せずにはゐられないのである。

「北の人」

○をさな兒

太田水穂

父母に手をば引かれてうれしきかこの子は足をあげつつぞ行く

金子薫園

いつかわが床に來りて眠りゐる兒を見る朝の寢覺よろしき

太田水穂 歌人。
名は貞一。長野縣師範學校出身。日本齒科醫學專門學校教授。

金子薫園 歌人。
名は雄太郎。落合直文の門下。新潮社員。

吉澤義則 國文學者。文學博士。東京帝國大學文科大學國文學科出身。廣島高等師範學校教授。京都帝國大學助教授に歴任。現に京都帝國大學教授。

二 國語の變遷

吉澤 義 則

言語は絶えず變化してゐる。しかもその變化は急劇にあらはれるものではなく、極めて徐徐に連続的に行はれて行くもので



吉澤 義 則

ある。随つて國語の歴史についても、その時期區分をすることは頗る困難である。紀元何年を境として、それ以前がどう、それ以後がどうといふやうな、明確な區分は勿論出來ることではない。しかし吾吾は國語の變遷の迹を通覽する時に、おぼろげながらも、或色の濃い部分と他の色の濃い部分とがあるやうに感じる。その境界はぼかされてゐて、何處と明確には指し難いけれども、

その色の濃いと思はれる部分部分を中心として見れば、やはり或程度までは時期の區分が出來るやうに思はれる。さうして、その區分は、史料の少ない奈良朝以前はさておいて、それ以後を大體、上古(奈良朝時代)・中古(平安朝時代)・近古(鎌倉室町時代)・近世(江戸時代)・現代(明治以後)といふやうに、政治史のそれに準據しても、甚しく不自然ではないやうである。畢竟、政治上の變革、政治の中心の移動は、人心の動搖を招致するものであり、人心の動搖は言語の上に反映せずには已まないからである。左に國語變遷の迹を大觀して見よう。

奈良朝時代は、漢文學や佛教も盛んであり、制度、文物すべて外國のものを取入れるに急な時代であつたから、外來語の國語に取入れられた數も、非常に多かつたことと思はれるが、歌の上に

あらはれたものは極めて少ない。散文の中には割合に多く見えるが、それもすべて名詞としての資格を與へられてゐるものばかりである。わが國語には限らないが、外來語の輸入は、殆どその國語の語彙を富ますだけで、語法までも影響を受けることは、極めて少ないものである。

平安朝時代は、平安奠都から約四百年、政治の中心が鎌倉に移るまでの間である。前代に引きつづいて重んぜられた漢文學が、一時全盛を極めた結果として、和歌の暗黒時代を現出したが、やうやく國粹に目覺めては和歌の復興となり、遂には、古今集の勅撰とまで展開していつた。平假名片假名は萬葉假名から脱化して、國語の表記は愈、便利になつた。そこに散文の文學が發達し、國語は愈、精鍊せられた。

平安奠都 桓武天皇
の延暦十三年。(一四
五)

古今集の勅撰 醍醐
天皇の延喜五年。
(一五五)

朱雀天皇 紀元一五九〇
年即位、一六〇六年讓
位。

和歌の用語は、前代から或意識をもつて選ばれたのであるが、この時代になつては愈、限定せられて、話語とは益、距離が出來た。常に和歌の用語ばかりでなく、散文の用語も、朱雀天皇の頃から次第に話語から離れる傾向を持つたらしい。この時代の末に至つては、この傾向は益、顯著となり、平安朝盛時の言語は、以後、長く文語の標準となつたのである。

この時代の外來語も主として漢語であつて、前代の如く名詞としてばかりでなく、形容詞、動詞、副詞等にも用ひられてゐる。なほそれらは殆ど國語化した姿をもつて、物語などにあらはれてゐる。

この時代の末は、所謂院政時代である。この頃になると、促音便や、バ行四段、マ行四段の動詞の長音便があらはれ、二段活用の一

段化の傾向もやや強くなり、また連體形の終止形同化の傾向も生じて、次の時代に於ける大變化を豫想せしめてゐる。藤原氏の勢力が衰へ、武士が漸く實力を得始めたことなどから、地方語が京都語に影響することが多くなつた結果であらうといはれてゐる。

鎌倉室町時代は、鎌倉幕府時代・吉野朝時代・室町幕府時代を含んだ約四百年間で、要するに武士の跋扈した時代である。この時代は、概していへば、戦亂が多く、人心は定まらず、學問・文藝は不振の時代であつた。文語と話語との懸隔は益々甚しくなつたが、その文語も、和歌はとにかく、散文に至つては、完全に前代のものを摸しきることが出来ないで、處處に當時の話語の面影を覗かせてゐる。一方にはまた、漢文脈を多分に取入れた和漢混淆の文章が

發達して、漢語の國語に入り來るものは愈々多くなつた。漢語はかうした文字の上から移植せられた外に、この時代には、主として禪僧によつて、直接支那から輸入せられたものが少なくない。例へば普請・行燈の類である。

江戸時代は、江戸幕府の時代約三百年で、戦亂が既に治まり、人が太平を樂しんだ時代である。この時代は、室町時代の言語を承けて、話語の整理せられた時代といふべく、動詞では「落つる」「受くる」等の二段活用の形は漸次滅亡して、「落ちる」「受ける」等の一段活用に統一せられ、音便では「忍うて」「頼うて」等、バ行四段マ行四段の長音便が廢退して、「忍んで」「頼んで」等の撥音便が進出し、關東語が勢力を得て後は、「流いて」の如きサ行四段のイ音便は、もとの形に還元せられた。助動詞「よう」「未來」です「指定」等の發達もあるが、三

元祿 東山天皇の御
代の年號。(三四八—
三四九)

百年を通じて、概しては甚しい變化を見ない時代である。方言では、江戸の發展と共に江戸言葉が發達し、次第に勢力を得て、文藝上では、今まで關西方言のために虐げられてゐた關東方言のために氣を吐くに至つた。江戸時代の文語は、大體に於て前代の繼承であつたが、元祿頃から振ひ興つた國學者は、雅馴な古の國語に憬れて、その國語相を己等の時代に再現しようとして、努力した。併し一方には又國語に無關心な漢學者があつて、その漢籍の讀み方が國語を混亂せしめたことも多かつた。

明治の普通文は、實に漢文讀み下しの影響を受けたものであつたのであるが、明治二十年代から動き始めた言文一致更生の機運は、花を開き、實を結び、種種の試鍊彫琢を経た結果、大正時代に入つては、威嚴の不足感から容易に採用せられなかつた新聞

の論說などにまで採用せられるやうになつて、文語文はだんだん影を潜めて來た。

外國語や外國語格を取入れることは、國語を豊富にし、表現に新しみを加へる利點もあるが、その濫用は國語の純正を害するもので、嚴に戒めなければならぬことである。名山、名川には日本アルプス、日本ラインの如く外國名をつけ、國産品にも片假名で西洋流の名をつけて得得としてゐる現代は、まことに外國語濫用の時代だといはれよう。我等の周圍には西洋風の名をつけたものが如何に多くあることか。これでは既に精神的に彼等に屈服してしまつてゐるといふべきで、世界諸國の上に立つて、世界の文化を指揮することはまだまだ前途遼遠であらう。さて國語は上述の如く、それ自身の動きにより、又外國語を取

入れることによつて幾變轉した。併し、その根柢の本質は少しも變つて居らぬ。どこまでも我等の祖先の精神がその中に生活したところの國語である。東西二大方言の中にも、亦多くの小さな方言を有する。併し、それも畢竟根幹を得て茂る枝葉である。我等は今もその中に住して、縦には祖先の心を受け、横には同胞相結ぶのである。國語は實に一國の標識であり、國體を維持し國民を結合する精神的の鎖である。これを世界の歴史に見るに、一國の國語の消長は、その國の國勢の消長に緊密な交渉をもつてゐる。故に、我等は現代の外國語濫用を悲しむと共に、方言の統一が速かに行はれぬことをも悲しまねばならぬ。方言は國語の表面だけの相違ではあるにしても、その相違は國語の力を殺ぐことが極めて大きいのである。而して方言の統一は、學校に於ける國語

教育だけで出来るものではない。新聞雜誌文學作品等も與かつて力はあるものの、なほそれだけでは出来るものでない。要は國民全體の自覺と努力とに俟たねばならぬ。

現在は、大體東京語が標準になつてはゐるが、未だ標準語の問題は明確に具體的に解決せられては居らぬ。方言統一に向つて進むに方つて、まづ必要な道標は標準語でなければならぬ。更に國語を純正ならしめるには如何にすべきか。漢字と共に取入れられた無數の漢語、近世以後取入れられた多くの歐米語、此等の整理を如何にすべきか。假名遣を如何にすべきか。此等はすべて國民全體の自覺に俟たねば解決せられぬ事柄である。國語の愛護、それが一部の學者にのみ唱へられて、未だ國民全體の聲とならぬのを悲しむ。

「國語史概説」

法皇 後白河法皇。

文治二年 紀元一〇八
六年。

建禮門院 高倉天皇

の中宮。安徳天皇

の御母。平清盛の

女、名は徳子。建保

元年(八七〇)薨去、

御年五十七。

北祭 加茂の祭。四

月の中の酉の日に

行はれた。

後徳大寺 左大臣藤

原實定。

花山院 大納言藤原

兼雅。

土御門 權中納言源

通親。

三 大原御幸

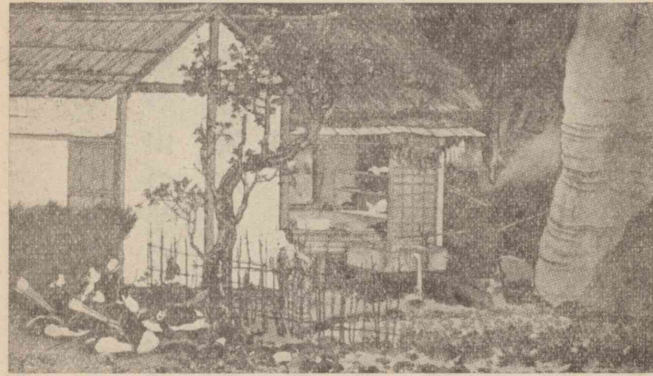
法皇は文治二年の春のころ、建禮門院の大原の閑居の御住まひ御覽ぜまほしう思し召されけれども、きさらぎ彌生の程は嵐烈しう、餘寒も未だ盡きず、峯の白雪消えやらで、谷のつららも溶解けず、かくて春過ぎ夏立ちて、北祭も過ぎしかば、法皇夜をこめて大原の奥へ御幸なる。しのびの御幸なりけれども、供奉の人人には、後徳大寺花山院土御門以下、公卿六人殿上人八人北面少少さむらひけり。

遠山にかかる白雲は、散りにし花の形見なり。青葉に見ゆる梢には、春の名残ぞ惜しまる。頃は卯月二十日あまりのことなれば、夏草の茂みが末を別入らせ給ふに、始めたる御幸なれば、御覽じ馴れたる方もなく、人跡絶えたる程も思し召し知られてあはれなり。

西の山の麓に一字の御堂あり、即ち寂光院これなり。舊う造りなせる泉水木立、よしあるさまの處なり。葺破れては霧不斷の香を焚き、扉落ちては月常住の燈を挑ぐ。とは、かやうの處をや申すべき。庭の若草茂りあひ、青柳絲を亂りつつ、池の浮草波に漂ひ、錦をさらすかとあやまたる。中島の松に懸れる藤波の、うら紫に咲ける色、青葉まじりの遅櫻、初花よりも珍しく、岸の山吹咲亂れ、八重立つ雲の絶間より、山時鳥の一聲も、君の御幸を待ち顔なり。法皇これを御覽あつて、かうぞ遊ばされける。

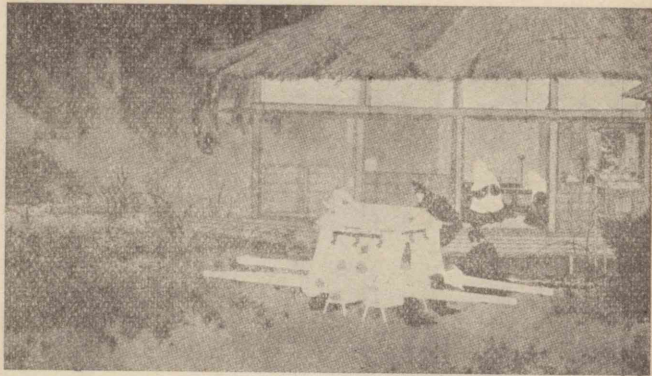
池水にみぎはの櫻散りしきて波の花こそさかりなり
けれ

瓢箪云云「和漢朗詠集」に見ゆる橋直幹の句



大原御幸

舊りにける岩の絶間より落ち來る水の音さへ、ゆゑび、よしある處なり。綠蘿の垣、翠黛の山、繪に描くとも筆も及び難し。さて、女院の御庵室を御覽あるに、軒には蔦朝顔はひ懸り、しのぶ交りの萱草わすれぐさ、瓢箪屢、空し、草顔淵が巷に滋く、藜蘆深く鎖せり、雨原憲が樞を濕ほす。とも謂ひつべし。杉の葺き目もまばらにて、時雨も霜も置く露も、洩る月影に争ひて、溜るべしとも見えざりけり。後ろは山、前は野邊、いささ小笹に風騒ぎ、世に立たぬ身の習とて、憂き節しげき竹柱、都の方の言づては、間遠に結へるませ垣や、僅に



下山觀山筆

こととふものとは、嶺に木傳ふ猿の聲、賤が爪木の斧の音、これらが音づれならでは、まさきのかづら青つづら、くる人稀なる處なり。
法皇、人やある、人やある。」と召されけれども、御いらへ申すものもなし。ややあつて、老い衰へたる尼一人参りたり。「女院はいづくへ御幸なりぬるぞ。」と仰せければ、「この上の山へ花摘みに入らせ給ひて候。」と申す。さこそ世を厭ふ御習とは言ひながら、さやらの事に仕へ奉る人もなきにや。御痛はしうこそ。」と仰せければ、この尼申しけるは、五戒十善の御果報の

五戒 不殺生・不偷盜・不邪淫・不妄語・不飲酒
十善 十惡をせぬこと
と。十惡とは、殺生・偷盜・邪淫・妄語・兩舌・惡口・綺語・貪欲・瞋恚・邪見。

盡きさせ給ふによつて、今かかる御目を御覽ぜられ候にこそ、捨身の行になじかは御身を惜しませ給ひ候べき」とぞ申しける。

この尼の有様を御覽ずれば、身には絹布のわきも見えぬものを結び集めてぞ著たりける。あの有様にてもかやうのこと申す不思議さよと思し召して、抑、汝は如何なるものぞ」と仰せければ、この尼さめざめと泣いて、暫しは御返事にも及ばず、ややあつて、涙を抑へて、申すにつけて、憚り覚え候へども、故少納言入道信西が女、阿波内侍と申すものにて候なり。母は紀伊二位、さしも御いとほしみ深うこそ候ひしに、御覽じ忘れさせ給ふにつけても、身の衰へぬるほど思ひ知られて、今更せむ方なうこそ候へ」とて、袖を顔に押當てて、忍びあへぬさま、目も當てられず、法皇、げにも汝は阿波内侍にこそあなれ、御覽じ忘れさせ給ふぞかし、何事につ

故少納言入道信西
藤原通憲
紀伊二位 信西の妻
朝子。

けても、ただ夢とのみこそ思し召せ」とて、御涙せきあへさせ給はねば、供奉の公卿、殿上人も、不思議のこと申す尼かなと思ひたれば、ことわりに申しけりとぞ、各、感じ合はれける。

さてかなたこなたを御覽あるに、庭の千草露おもく、籬に倒れかかりつつ、外面の小田も水越えて、鳴立つ際も見えわかず、さて女院の御庵室に入らせおはしますし、障子を引明けて御覽あるに、一間には來迎の三尊おはします。中尊の御手には五色の絲を懸けられたり。左に普賢の繪像、右に善導和尚、並に先帝の御影を懸けられたり。蘭麝の匂に引きかへて、香の煙ぞ立ちのぼる。

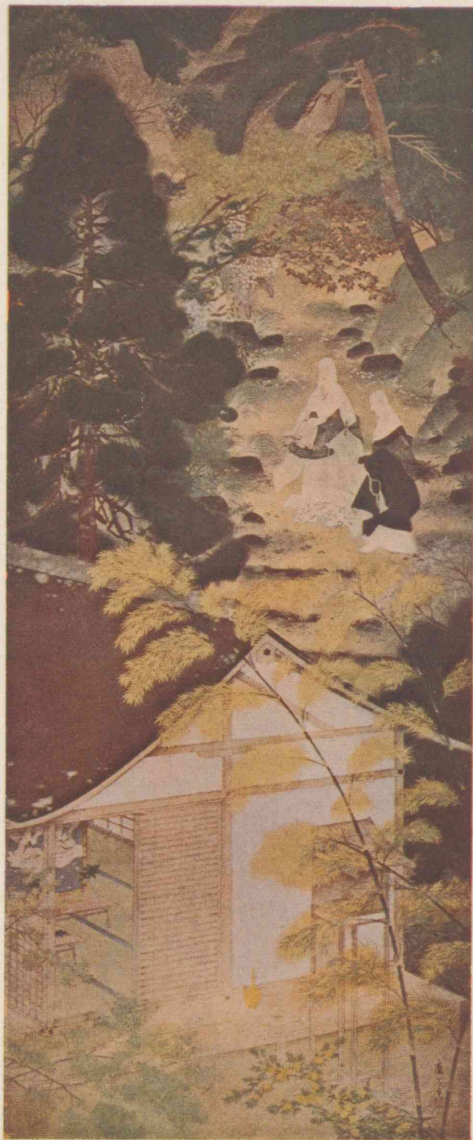
障子には、女院の御歌と思しくて、

思ひきや深山のおくにすまひして雲居の月をよそに見むとは

來迎の三尊 彌陀・
觀音・勢至。
善導和尚 唐の名僧。

さて傍を御覽あるに、御寢處とおぼしくて、竹の御竿に、麻の御衣、紙の衾など懸けられたり。さしも本朝漢土の妙なる類數をつくしし綾羅錦繡の装も、さながら夢とぞなりにける。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿殿上人も、まのあたり見奉りし事ども今のやうに覺えて、皆袖をぞしぼられける。

ややあつて、上の山より濃き墨染の衣著たりける尼二人、岩のかげちを傳ひつつ、おり煩ひたるさまなりけり。法皇、あれは如何なるものぞ。」と仰せければ、老尼涙を抑へて、花筐はなかご臂にかけ、岩躑躅とり具して持たせ給ひて候は、女院に渡らせ給ひ候。爪木に蕨折りそへて持ちたるは、鳥飼中納言維實が女、先帝の御乳母大納言典侍局。」と申しも敢へず泣きにけり。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿殿上人も、皆袖をぞ濡らされける。



手向の花 (岩田正己筆)

女院は、世を厭ふ御習と言ひながら、今かかる有様を見え参らせむずらむ恥かしさよ、消えも失せばやと思し召せどもかひぞなき。宵宵毎の鬨伽の水、掬ぶ袂もしをるるに、曉起きの袖の上、山路の露も滋くして、しほりやかねさせ給ひけむ、山へも返らせ給はず、また御庵室へも入らせおはしまさず、あきれて立たせましましたるところに、内侍の尼まゐりつつ、花筐をば賜はりけり。世を厭ふ御習、何か苦しう候べき。早早御見参あつて、還御なし参らせ候へ。」と申されければ、女院御涙を抑へて御庵室に入らせおはします。一念の窓の前には攝取の光明を期し、十念の柴の櫃には聖衆の來迎をこそ待ちつるに、おもひの外の御幸かな。」とて、御見参ありけり。

―著者未詳「平家物語」―

鴨長明 もと後鳥羽上皇の北面の武士。後に遁世して僧となる。歌文に達してゐた。建保四年(一一七二)寂、年六十四。

四方丈の記

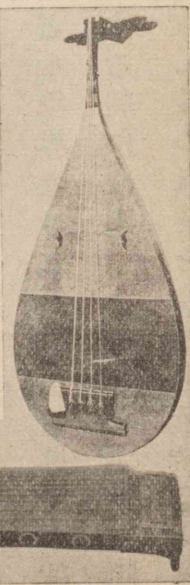
鴨長明

ここに六十の露消え方に及びて、更に末葉のやどりを結べることあり。言はば狩人の一夜の宿をつくり、老いたる蠶の繭をいとなむが如し。その家のありさま、世の常にも似ず、廣さは僅に方丈、高さは七尺が内なり。處を思ひ定めざるが故に、地を占めて造らず、土居を組み、うちおほひを葺きて、接目毎にかけがねをかけたり。もし心に適はぬことあらば、易く外に移さむがためなり。その改め造る時、幾ばくの煩ひかある。積むところ僅に二輛なり。車の力を報ゆる外は、更に用途いらす。

いま日野山の奥に跡を隠して後、南に假の日がくしをさし出して、竹の簀子を敷き、その西に闕伽棚を作り、中には西の垣にそ

日野山 今では京都市伏見区にある地名。

琵琶と折箏



へて阿彌陀の畫像を安置し奉り、落日をうけて眉間の光とす。かの帳の扉に普賢並に不動の像を懸けたり。北の障子の上に小さき棚を構へて、黒き皮籠三四合を置く。すなはち和歌管絃、往生要集、如きの抄物を入れたり。傍に、箏琵琶各、一張をたつ。いはゆる折箏、琵琶これなり。東にそへて蕨のほどもを敷き、つかなみを敷きて夜の床とす。東の垣に窓をあけて、ここに文机を出せり。枕の方に炭櫃あり、これを柴折りくぶるよすがとす。庵の北に少地を占め、あばらなる姫垣を圍ひて園とす。すなはち諸の藥草を植ゑたり。假の庵の有様かくの如し。

往生要集 高僧源信(恵心僧都)の著。

語らふ毎に云云「山家集」堀川局の歌「この世にてかたらひおかむ時鳥死出の山路のしるべともなれ」
 跡の白波「拾遺集」沙彌滿誓の歌「世の中を何にたへむ朝ぼらけ漕ぎゆく船のあとの白波」
 岡ノ屋 京都府宇治郡宇治村に屬する地で、宇治川に臨んでゐる。
 滿沙彌 沙彌滿誓。元明・元正天皇の御代の人。

その處のさまを言はば、南に窺あり、岩を疊みて水を溜めたり。林軒近ければ、爪木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。正木のかづら跡を埋めり。谷茂けれど西は晴れたり。觀念のたよりなきにしもあらず。春は藤波を見る。紫雲の如くにして西の方に匂ふ。夏は時鳥を聞く。語らふ毎に死出の山路を契る。秋は蛸の聲耳に充てり。空蟬の世を悲しむかと聞ゆ。冬は雪を憐む。積り消ゆるさま罪障に譬へつべし。もし念佛ものうく、讀經まめならざる時は、みづから休み、みづから怠るに、妨ぐる人もなく、又恥づべき友もなし。殊更に無言をせざれども、獨り居れば口業をさめつべし。必ず禁戒を守るとしもなけれども、境界なければ、何につけてか破らむ。もし跡の白波に身をよする朝には、岡ノ屋に行きかふ船を眺めて、滿沙彌が風情をぬすみ、もし桂の風葉を鳴らす夕べには、潯

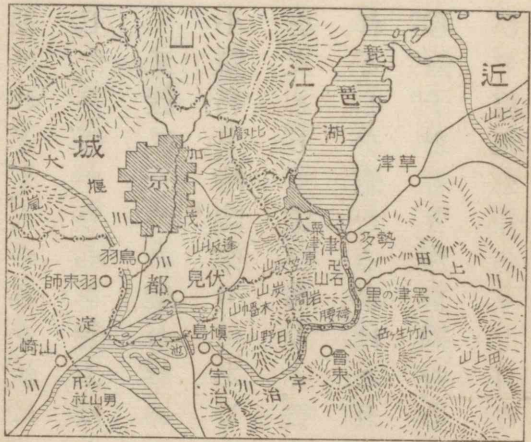
潯陽の江 支那の西江省にある。白樂天の詩に「潯陽江頭夜送客、楓葉荻花秋瑟瑟。」
 源都督 桂大納言源經信。桂流琵琶の元祖。堀河天皇の御代の人。
 秋風・流泉 ともに樂曲の名。

木幡山・炭山 京都府宇治郡。
 伏見・鳥羽 京都市伏見區。
 羽束師 京都府乙訓郡。

陽の江を思ひやりて、源都督の流を習ふ。もし餘りの興あれば、屢松の響に秋風の樂をたぐへ、水の音に流泉の曲を操る。藝はこれ拙けれども、人の耳を悦ばしめむともあらず。獨り調べ、獨り詠じて、みづから心を養ふばかりなり。
 又麓に一つの柴の庵あり。即ちこの山守が居る處なり。彼處に小童あり、時時來りてあひとぶらふ。もしつれづれなる時は、これを友として遊びありく。彼は十六歳、我は六十、その齡ことの外なれど、心を慰むる事はこれ同じ。あるは茅花を抜き、岩梨を採る。又零餘子をもち、芹を摘む。あるはすそわの田居に至りて、落穂を拾ひて穂組を作る。もし日うらかなれば、嶺に攀登りて遙かに故郷の空を望み、木幡山、伏見の里、鳥羽、羽束師を見る。勝地は主なければ、心を慰むるに障なし。歩み煩ひなく、志遠く至る時は、これよ

笠取 京都府宇治郡。岩間・石山・栗津。今は大津市に屬する。
 蟬丸 仁明天皇の御代の歌人。
 田上川 滋賀縣栗太郡。
 猿丸大夫 歌人。傳未詳。

横島 京都府久世郡。山鳥の云云。「玉葉集」行基の歌「山鳥のほろほろと鳴く聲聞けば父かと思ふ母かと思ふ」



り峯つづき、炭山を越え、笠取を過ぎて、あるは岩間に詣で、あるは石山を拜む。もしは又栗津の原を分けて蟬丸の翁が跡を弔ひ、田上川を渡りて猿丸大夫が墓を尋ぬ。歸るさには、折につけつつ櫻を狩り、紅葉を求め、蕨を折り、木の實を拾ひて、かつは佛に奉り、かつは家苞にす。もし夜靜かなれば、窓の月に故人を偲び、猿の聲に袖を潤ほす。叢の螢は遠く槇島の篝火にまがひ、曉の雨はおのづから木の葉吹く嵐に似たり。山鳥のほろほろと啼くを聞きて、父か母かと疑ひ、峯のかせぎの近く馴れたるにつけても、世に遠ざかる程を知る。あるは埋み

かせぎの云云。「山家集」西行法師の歌「山ふかみ馴るるかせぎのけぢかきに世に遠ざかる程ぞ知らるる」
 恐しき云云。「山家集」西行法師の歌「山深みけぢかき鳥の音はせて物恐しき鳥のこゑ」

がうな やどかり。みさご 「うなたか」ともいひ、猛禽類に屬する鳥。

火を掻起して老の寢覺の友とす。恐しき山ならねど、梟の聲をあはれむにつけても、山中の景色折につけて盡くることなし。

大方この處に住みそめし時は、あからさまと思ひしかど、今までに五年を経たり。假の庵もやや古屋となりて、軒には朽葉深く、土居に苔むせり。おのづから事のたよりに都を聞けば、この山に籠りて後、やむごとなき人のかくれ給へるも數多聞ゆ。ましてその數ならぬたぐひ、つくしてこれを知るべからず。度度の炎上に滅びたる家またいくそばくぞ。ただ假の庵のみのどけくして恐なし。程せばしといへども、夜臥す床あり、晝居る座あり、一身を宿すに不足なし。がうなは小さき貝を好む、これよく身を知るによりてなり。みさごは荒磯に居る。即ち人を恐るるが故なり。われ又かくの如し。身を知り世を知れば、願はず交らはず、ただ靜か

なるを望とし、愁なきを樂しみとす。すべて、世の人の住家を造るならひ、必ずしも身のためにはせず。あるは妻子、眷屬のために造り、或は親昵朋友のために造る。あるは主君、師匠、および財寶、馬牛のためにさへこれを造る。われ今身のために結べり、人のために造らず。故いかんとなれば、今の世のならひ、この身のありさま、伴なふべき人もなく、頼むべき奴もなし。たとひ廣く造れりとも、誰をか宿し、誰をか据ゑむ。

それ人の友たる者は富めるを貴み、懇なるを先とす。必ずしも情あると直なるとをば愛せず。ただ絲竹、花月を友とせむには如かず。人の奴たる者は、賞罰の甚しきを顧み、恩の厚きを重くす。更にはごくみあはれぶといへども、安く靜かなるをば願はず。ただわが身を奴とするには如かず。若しなすべき事あれば、則ちおの

人の友たる云云 慶
滋保胤の「池亭記」
に「人之爲友者、
以勢、以利、不以
以淡、交、不如此
無友。」

づから身を使ふ。たゆみならずしもあらねど、人を従へ、人を顧みるよりは安し。もしありくべき事あれば、みづから歩む。苦しといへども、馬鞍、牛車と心を悩ますには似ず。今一身を分ちて二つの用をなす。手の奴、足の乗物、よくわが心に適へり。心又身の苦しみを知れば、苦しむ時は休めつ、まめなる時は使ふ。使ふとても度度すぐさず、ものうしとても心を動かす事なし。いかに況や、常にありき常に動くは、これ養生なるべし。何ぞ徒に休み居らむ。人を苦しめ人を悩ますはまた罪業なり。いかが他の力をかるべき。衣食の類また同じ。藤の衣、麻の衾、得るに隨ひて肌を隠し、野邊の茅花、峯の木の實、命を繋ぐばかりなり。人に交はらざれば、姿を恥づる悔もなし。糧乏しければ、おろそかなれども、なほ味を甘くす。すべてかやうの事、樂しく富める人に對して言ふにはあらず。

身をば浮雲云云「維摩經」に「是身如浮雲、須臾變滅。」三界は云云「華嚴經」に「三界唯一心、心外無別法。」七珍 七寶といふも同じい。金・銀・水精・瑠璃・琥珀・瑪瑙・硨磲。

魚に云云「莊子」に「子非魚、安知魚之樂。」

唯わが身一つにとりて、昔と今とをたくらぶるばかりなり。大かた世を通れ身を捨てしより、恨もなく、恐もなし。命は天運に任せて、惜しまず、厭はず。身をば浮雲にならずらへて、頼まず、まだしとせず。一期の樂しびは轉寢の枕の上に極まり、生涯の望は折折の美景に残れり。それ三界は唯心一つなり。心もし安からずば、牛馬七珍もよしなく、宮殿樓閣も望なし。今寂しき住まひ、一間の庵、みづからこれを愛す。おのづから都に出てては、乞食となれる事を恥づといへども、歸りて此處に居る時は、他の俗塵に著する事を憐ぶ。若し人この言へる事を疑はば、魚鳥の有様を見よ。魚は水に飽かず、魚にあらざればその心を知らず。鳥は林を願ふ、鳥にあらざればその心を知らず。閑居の氣味も亦かくの如し。住まずして誰か悟らむ。

「方丈記」

五 物外の神韻

夏目 漱石

余は明かに何事をも考へて居らぬ。又は慥に何物をも見て居らぬ。わが意識の舞臺に著しき色彩を以て動くものがないから、われは如何なる事物に同化したとも云へぬ。されども、われは動いて居る。世の中に動いても居らぬ、世の外にも動いて居らぬ。只何となく動いてゐる。花に動くにもあらず、鳥に動くにもあらず、人間に對して動くにもあらず、只恍惚と動いてゐる。

強ひて説明せよと云はるるならば、余が心は只春と共に動いて居ると云ひたい。あらゆる春の色、春の風、春の物、春の聲を、打つて固めて、仙丹に練上げて、それを蓬萊の靈液に溶いて、桃源の日で蒸發せしめた精氣が、知らぬ間に毛孔から染込んで、心が知覺

夏目漱石 英文學者・小説家。名は金之助。東京の人。東京帝國大學文科大學英文學科出身。同大學・第一高等學校の講師。後、東京朝日新聞社に入つた。大正五年歿、年五十。

せぬうちに飽和されて了つたと云ひたい。

普通の同化には刺戟がある。刺戟があればこそ愉快であらう。余の同化には、何と同化したか不分明であるから、毫も刺戟がない。刺戟がないから、窈然として名狀し難い楽しみがある。風に揉まれて上の空なる波を起す、輕薄で騷しい趣とは違ふ。目に見えぬ幾尋の底を、大陸から大陸まで動いてゐる潢洋たる蒼海の有様と形容する事が出来る。只それ程に活力がないばかりだ。然し、そこに却つて幸福がある。偉大なる活力の發現は、此の活力がいつか盡き果てるだらうとの懸念が籠る。常の姿にはさういふ心配は伴なはぬ。常よりは淡きわが心の、今の状態には、わが烈しき力の銷磨しはせぬかとの憂を離れたるのみならず、常の心の可もなく不可もなき凡境をも脱却してゐる。淡しとは單に捕へ

難しと云ふ意味で、弱きに過ぎる虞を含んでは居らぬ。冲融とか澹蕩とか云ふ詩人の語は、最も此の境を切實に言ひ了せたものだらう。

此の境界を畫にして見たら何うだらうと考へた。然し、普通の畫にはならないに極まつてゐる。我等が俗に畫と稱するものは、只眼前の人事風光を、有りの儘なる姿として、若しくは之をわが審美眼に濾過して、繪絹の上に移したものに過ぎぬ。花が花と見え、水が水と映り、人物が人物として活動すれば、畫の能事は終つたものと考へられてゐる。もし此の上に一頭地を抜けば、わが感じたる物象を、わが感じたる儘の趣を添へて、畫布の上に淋漓として生動させる。或特別の感興を、己が捕へたる森羅の裏に寓するの、此の種の技術家の主意であるから、彼等の見たる物象觀

が明瞭に筆端に述つて居らねば、畫を製作したとは云はぬ。己はしかじかの事をしかじかに觀、しかじか感じたり、その觀方も感じ方も、前人の籬下に立ちて、古來の傳説に支配せられたるにあらず、しかも最も正しくして最も美しきものなりとの主張を示す作品にあらざれば、わが作と云ふを敢へてせぬ。

此の二種の製作家に主客深淺の區別はあるかも知れぬが、明瞭なる外界の刺戟を待つて始めて手を下さすのは、雙方とも同一である。されど、今わが描かんとする題目は、



夏目漱石の筆

さほどに分明なものではない。あらゆる限の感覺を鼓舞して、之を心外に物色した所で、方圓の形、紅緑の色は無論、濃淡の陰、洪纖の線を見出しかねる。わが感じは外から來たのではない。たとひ來たとしても、わが視界に横たはる一定の景物でないから、之が原因だと指を舉げて明かに人に示す譯に行かぬ。あるものは只心持である。この心持をどう現はしたら畫になるだらう。否この心持を、如何なる具體を藉りて、人の合點するやうに髣髴せしめ得るかが問題である。

普通の畫は、感じはなくても物さへあれば出來る。第二の畫は物と感じと兩立すれば出來る。第三に至つては、存するものは只心持だけであるから、畫にするには、是非ともこの心持に恰好なる對象を選ばなければならぬ。然るに、この對象は容易に出て來

ムード 様式。
 文與可 支那宋代の
 人。名は同。號は
 笑笑先生。書道に
 通じ、又善く竹を
 畫いた。
 雲谷 室町時代の畫
 僧雪舟。號して雲
 谷軒といふ。備中
 の人。水墨の畫に
 すぐれてゐた。永
 正三年(二六〇)歿、
 年八十七。
 大雅堂 池野氏。京
 都の人。南宋畫の
 開祖。安永五年(三
 〇三)歿、年五十四。
 燕村 本姓谷口。俳
 人で兼て畫を善
 くした。天明三年
 (二四三)歿、年七十。

ない。出て來ても、容易に纏まらない。纏まつても、自然界に存する
 ものとは丸で趣を異にする場合がある。随つて、普通の人から見
 れば、畫とは受取れない。描いた當人も、自然界の局部が再現した
 ものとは認めて居らぬ。只感興のさした刻下の心持を幾分でも
 傳へて、多少の生命を愉悅し難きムードに與ふれば、大成功と心
 得てゐる。古來から、此の難事業に全然の績を收め得たる畫工が
 有るか無いか知らぬ。或點までこの流派に指を染め得たるもの
 を舉ぐれば、文與可の竹である、雲谷門下の山水である、下つて大
 雅堂の景色である、燕村の人物である。泰西の畫家に至つては、多
 く眼を具象世界に馳せて、神往の氣韻に傾倒せぬ者が大多數を
 占めてゐるから、此の種の筆墨に物外の神韻を傳へ得るものは、
 果して幾人あるか知らぬ。

「草枕」下

藤岡東圃 國文學
 者。文學博士。名
 は作太郎。石川縣
 の人。東京帝國大
 學文科大學國文學
 科出身。第三高等
 學校教授。東京帝
 國大學助教授に歴
 任。明治四十三年
 歿、年四十一。

六 わが國の繪畫

藤岡 東圃

日本畫と西洋畫とは漸次混融して、その區劃も明瞭ならざる
 に至るが如しといへども、この兩者の純粹なるものを比較すれ
 ば、各自の特色は猶甚だ顯著なり。嘗に絹紙と彩具との相違のみ
 ならむや、その用意筆法等に於て皆然り。彼にあつては藝術は科
 學と並行し、理性は想像の銜となりて、遠近・明暗力めて自然に背
 かざらむことを期し、此にあつては文化の精神的方面獨りまづ
 進み、筆を揮ふもの感興に乗じて腦裏の印象を瀉ぎ出す。彼は色
 彩を旨とし、此は描線を重んじ、彼は實相の通りに空氣の色をも
 漏らすことなく、此は主體の外は生地の儘に存す。一は濃豔、一は
 瀟洒、一は輪奐たる樓臺に顯官が客を引く如く、一は幽閑なる茅

屋に高士が梅を愛するに似たり。此等の差別は蓋しその初よりして然りしにあらざ、各自獨立したる歴史が漸次に養成したるものにして、今はた兩洋交通の歴史によりて、これを合一せむとする傾向あるなり。

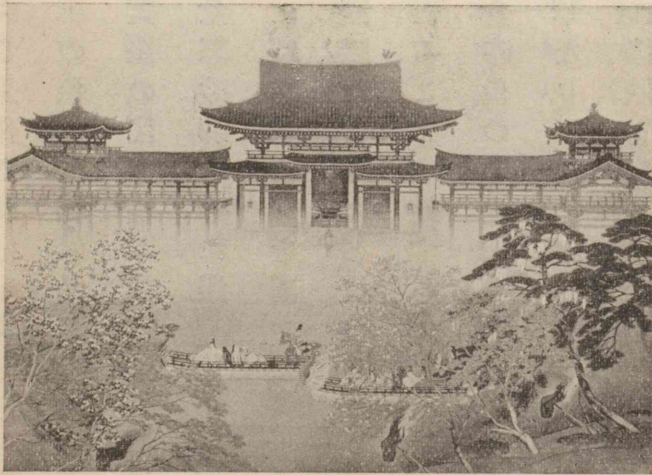
わが國の文藝に於ける佛教の感化の甚深なることは多言を要せず。眞の美術の歴史といふは聖德太子の佛教興隆に始まり、爾來進歩劇甚、以て偉大なる奈良朝に及べり。されどこの時代も、彫塑に於てこそ千古無比の名を博すべけれ、繪畫の歩調は未だこれに伴はず。平安朝に巨勢金岡が出てし頃より、漸く丹青全盛の世は來れるなり。而して奈良朝の彫塑がなべて佛像なるが如く、平安朝の繪畫も概して佛畫の外に出でず。按ふに、平安朝の如く形式美を偏重したる時代は、他に類例を見ず。佛教も亦形相

巨勢金岡 畫家。巨勢家の開祖。清和・陽成・光孝・宇多・醍醐の五朝に歴仕して大納言に至つた。

法成寺 治安三年(六一三)藤原道長の建立したるもの。
法勝寺 承保二年(一一三三)白河天皇の勅願によつて建立されたもの。

鳳凰堂 京都府久世郡宇治町にある平等院。もと源融の別荘であつたが、陽成天皇の行宮、宇多・朱雀兩天皇の離宮となり、又藤原道長の山莊となり、その子頼通は遂に佛像を安置して寺とした。

の具足によりて、内心の信仰に近づくべしとしたり。法成寺・法勝寺の如き、今廢墟をだに存せざれども、金堂・講堂・七寶莊嚴、天を摩する大塔、虹と曳く廻廊、すべて一代の工を盡しし状態は歴史の傳ふる所、今に存する鳳凰堂を見てもその一端を覗ふべし。香煙徐に薫じて幢幡を掠め、蓮華頻りに散つて轉讀にたぐふ。龍頭の舟は池上に浮んで笙鼓月に互え、頻伽の袖は庭前に翻りて舞容風に堪へず。恰もこれ坐ながらなる極樂淨土、紫雲の來迎を待たずして、身は



(筆天彩村田) 堂 鳳 鳳

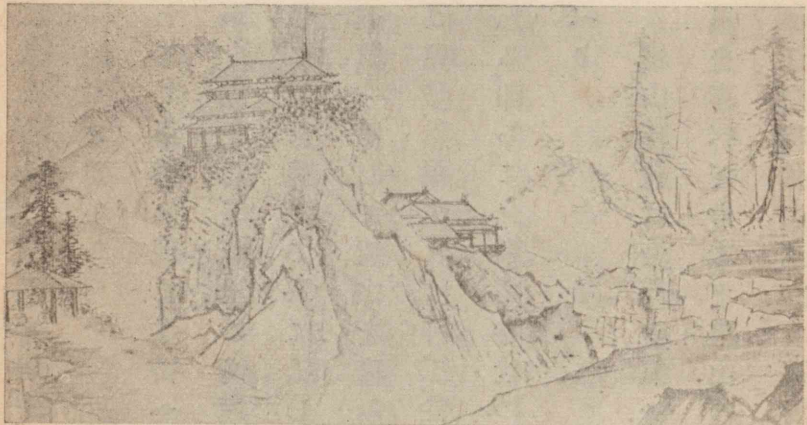


平治物語繪卷

圓光大師 淨土宗の
開祖源空。號は法
然。建曆二年(一一七
二)寂、年八十。

既に汚濁世界を離る。かくの如き場
に用ふる畫像なれば、彩華炫耀、丹碧
映射、その色は珊瑚・水晶を碎き、その
線は黄金の箔を切り、或は慈悲圓滿
或は忿怒破邪、十分に濃く、飽くまで
鮮かに、精を窮め、微を聞きて、後世の
乾枯・洒脫なるものとは全く撰を異
にしたること、想見するに足る。
鎌倉時代の繪卷物も亦日本繪畫
の精華なり。平治物語繪卷等は源平
鬭争の慘狀を寫し、圓光大師畫傳等
は新佛敎勃興の機運に隨ふ。いづれ

僧雪舟 前章既出。



雪舟筆

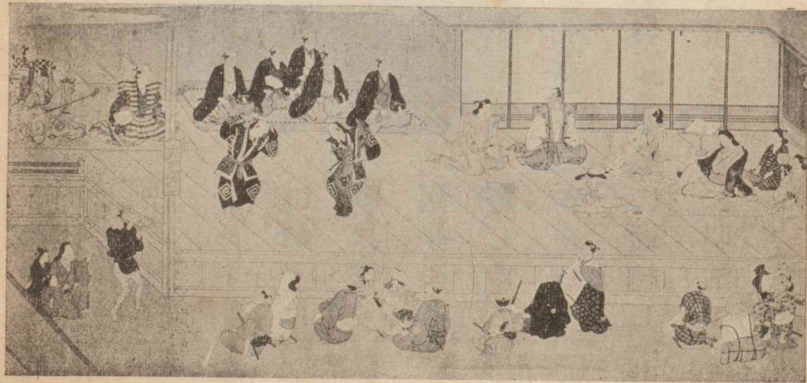
も時代の反映にして又不朽の逸品
たるを失はざれども、内容・外形共に
根本の變化を受けたるは、實に東山
時代の繪畫にして、僧雪舟等その代
表者たり。この革新は禪宗の提擲に
よりて成り、鎌倉時代にこの宗の傳
來せしより、漸く養ひ來れる勢力の、
ここに頂點に達したるものにして、
香茶の技と榮枯を共にせり。
抑、平安朝の佛寺を去つて禪刹の
門をくぐるや、彼此別天地の感なく
んばあらず。結跏趺坐して寂靜の境

に入れば、物の美醜も眼を遮らず。一旦その道に悟入すれば、經典・佛像何の要かあらむ。教外別傳といひ、以心傳心といひ、精神を主として形體に泥まず。譬へば、能樂に何等の背景を設けずして、しかも能く雲煙萬里の情趣を偲ばしむるが如し。繪畫もこれに同じく、色を棄てて筆に託し、巧を抛ちて氣を驅り、蒼枯にして恬澹破墨一掃して遠山を産み、秃筆數行にして樹石を刻む。一見すれば兒戲、熟視すれば神工、益、味はうて益、趣あり。恍惚として吾、我を忘る。即ちこれ東山時代の特色にして、流風餘韻延いて近代に及べり。

桃山時代は豪華の氣一世を蓋ひ繪畫も稍移りて雄大穠麗の風を喜べども、未だ東山の根據を衝くに及ばざりき。江戸時代に至つて、幕府の消極なる方針は更にその規模を縮

狩野 狩野正信を祖とする日本畫の一派。正信は足利義政に仕へた人。住吉 住吉慶恩を祖とする日本畫の一派。慶恩は建仁・元久頃の人。その子孫の具慶に至り、狩野家と相並んで江戸幕府の御畫師となつた。光琳 尾形氏。光琳派の祖。享保元年(一七三〇)歿、年五十六。一蝶 英氏。享保九年歿、年七十三。菱川師宣 菱川派の祖。元祿七八年頃歿。大雅 前章既出。

めて、枯淡の域に歸らしめ、門閥の貴に誇れる狩野・住吉も先人の糟粕を嘗むるのみ。元祿の盛時には、裝飾に傾ける光琳、滑稽の才ある一蝶あり。菱川師宣以來の浮世繪が、時勢粧を寫して、山水・花鳥以外に題目を求めたるは、最も注意すべしといへども、鄙俗に流れて遂に高尚なる趣味に應ずる能はず。大雅等の文人畫は、東山の繪畫に比すれば、全然別種のものに屬すれども、匠氣を忌み、形似を疎にし、氣韻生動を以て第一義とするところは、即ち相似たり。應



(筆宣師川菱) かわるさ人二

應舉 圓山氏。圓山派の祖。丹波の人。寛政七年(二四五)歿、年六十三。訥言 田中氏。尾張の人。文政六年(二四三)歿。容齋 菊池氏。名は武保。明治十一年(二五三)歿、年九十。

舉等の寫生畫は自然の摸寫に力めて、別に一流を立てたるものなれども、また清淡洒脫の習を脱するを得ず。訥言が創めたる土



牡丹 (筆舉應山圓)

佐古風、容齋が好める歴史畫の如きは、即ち學界に於ける國學の興隆に齊しく、また時

勢の反響なり。但し、此は彼の如き價值なきを憾とするのみ。一派また一派、各盛衰の數を免れざりしが、未だその間に崛起して斯道の根本的革新に成功せるものなく、かかるうちに明治の昭代は來れり。

〔東圃遺稿〕

七一人一回限

山本有三

山本有三 文學者。名は勇造。東京帝國大學文科大學獨逸文學科出身。元早稻田大學講師。文展 文部省美術展覽會の略。今の帝國美術院の前身。

以前私の知つてゐる畫家で、文展に馬の繪を出して入選した人がある。それからといふものは、その畫家は馬の繪ばかり書いて



山本有三

てゐる。註文する方も馬の繪なら安心して頼めるし、書く方もその方が樂だから、どんどん註文に應じた。かくて彼は馬の繪ばかり書いてゐるうちに、たちまちにして畫室を作り、たちまちにして小金持になつてしまつた。一つのを何遍も書いてゐながら、さういふ身分になつたので、私は少し羨ましい氣がした。自分がたづさはつてゐる文學の方では、同じものを二

度書くといふことは許されない。そんなことをすれば、所謂原稿の二重賣と非難されて、たちまち文壇から葬り去られてしまふであらう。さういふ上では、吾吾は甚だ割が悪いと思つた。併しよく考へて見ると、二度繰返されぬといふことは却つて有り難いことだと思ふ。繰返すことが絶対に許されないとここにこそ、はじめで本當の創作は生れるのではないか。

なるほど、馬ばかり書いて賣飛ばしてゐたら、小金は溜るかも知れない。併し、そんな男は決して藝術家を以て遇すべき人間ではないと思ふ。勿論、年中馬ばかり書いてゐようとも、一回毎に新しい境地を開いてゐるのなら、それは大いに尊敬すべきことだが、その畫家はいつでも殆ど同じ筆法なのである。題材が同一な上に、その態度も表現も同一なのである。私は暫してもそんな男

を標準にして物を考へたと思ふと、淺ましい氣がする。

およそ藝術上の創作は、必ず一回限のものであつて、繰返さるべきものではない。繰返されるやうなら、もう創作とはいはれない筈である。

敢て創作だけに限らない。すべて眞劍なものは一回限のものではあるまいか。

この間「改造」で、某氏の「對比全慶應敗戦記」といふものを讀んだ。選手である某氏がみづから書いたものだけに、悲痛の感が深かつた。併し、その敗因は一回試合であつたために、みんな固くなつたからであるといふ言葉には、私は門外漢ではあるが、どうも同

ずることは出来なかつた。某氏は三回試合を主張したのだといふ。なるほど一回試合だと固くなる。それはあり得ることと思ふ。けれども、固くなつたのは慶應だけであらうか。否、海を越えて他國にやつて來たフイリッピン軍こそ、一層固くなつてゐた筈ではあるまいか。さう思ふと、一回試合のために固くなつて敗けたといふ説は、どうも受けとれない。某氏は三回勝負の方が實力の試合が出来るといふ。いかにも平均された力量は、その方が出るかも知れない。併し、勝負は平均點數を取ることではない。勝つか負けるか、どちらかである。平生どんなに實力があつても、試合に負けたら、やはり負けたのである。どこかに力の足りないところがあるに相違ない。一番好い例は眞劍勝負の場合である。どちらかが「お面」をやられたとする。もう脳天を打割られた以上、いくら

第二回戦だの、第三回戦だのといつて見たところが、試合の出来る筈がない。三回勝負を云云するといふことは、何處かに眞劍味が缺けてゐるのではあるまいか。

一回限といふことは眞劍勝負である。今度負けてもこの次にといふことがない。それ一つが、殺すか殺されるか、叩き潰すか叩き潰されるかの境である。もうこれつきしといふところにあらゆる緊張が繋がつてゐる。

私はこのことを思ふ度に、那須與一扇の的話を思ひ出す。何故あの傳説が今でも吾吾に力強く迫つて來るのか。何故あれが悲壯なのか。一言にしていへば、一回限だからである。即ち、生死も榮辱も、かかつて一本の矢の上にあるからである。若しその矢を

射損ずるならば、弓切り折り自害して、人に再び面を向ふべからず。』である。いや、自分だけが切腹しただけでは濟まされない。それこそ東國武士の名折であり、源氏全體の屈辱である。それを生かすか殺すかは、たつた一本の矢できまる。そこが手に汗を握らせる所であり、涙を誘ふ點なのである。あれが若し二度目に當つたのであつたら、決して後世の語草とはならなかつたであらう。

私は能を見るとよく思ふことであるが、文學としての謠曲にはさして頭を下げたことがないのに、六平太氏あたりのものを見ると、しばしば緊張させられる。それにはいろいろな理由もあらうが、能が一人一役一回限といふことも、その重要な一因であらうと思ふ。芝居は一興行が二十日も二十五日もあるせぬか、役者の藝に何處か「まあ明日に」といふ氣持が見える。ところが、能は

六平太氏 姓は喜多、
現代能樂の大家。

一日ぎりて、明日といふものがない。今日やつたら、今度はいつ出るか分らないのである。どうかしたら、その一日だけでも、もうそれを再びやれないかも知れない。それだけに、その日にしつかりしたものを見せなければ、一生生かせる時がないかも知れないのである。明日になつて完品を見せようとしても、もう間に合はないのだから、いきほひ眞劍味がにじみ出るのはあるまいか。

入場券には、何の入場券でも、「御一人一回限」といふ文句がきつと刷込んである。藝術の殿堂へは別に入場券の必要はないが、その入口には大きく、「一人一回限」と書いてある筈である。そして、それはまた人生の入口にも大書してある文字である。併し、人は多くそれを見ないで通り過ぎる。

「途上」

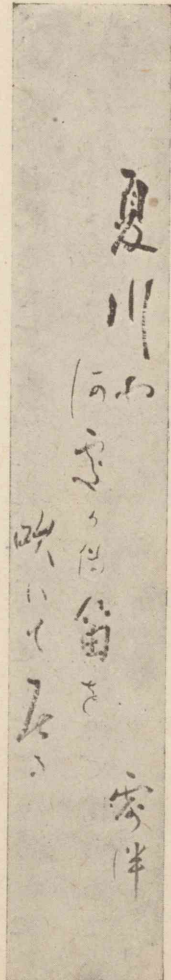
幸田露伴 小説家。國文學者。文學博士。名は成行。嘗て京都帝國大學講師であつた。現に帝國學士院會員。

夏川や 露伴何處かで笛を吹いて居る

八 受 發

幸 田 露 伴

苟も身を學藝に委ねむとせば、先づ受發の二途に於て大丈夫底の覺悟あるを要す。受とは内の外に受くるなり、發とは外に内の發するなり。受くることは須らく大海の百川を呑むが如くな



蹟筆伴露田幸

るべし、發することは宜しく甘雨の八方に澆ぐが如くなるべし。受くることの多からざるをこれ嫌ひて、川の大、川の小を嫌はず。發するの豊かならざらむことをこれ恐れて、方の東方の西を問はず。これを受發二途に於ける大丈夫底の覺悟とす。受くるに嫌

ふところあり、發するに問ふところあるは、兒女の情のみ、大丈夫の覺悟にあらず。

受は發の本なり、發は受の末なり。途は二にして實は一、受を能くすれば發はその中に在り。大賢は能く受く。中才は勤めて克く受く。賤人は好んで受くるあり、敢て受けざるあり。誓つて必ず賤人たらざらむを期する、之を眞に身を學藝に委ぬといふ。受の途に於て工夫刻苦する者は、學藝を成すに庶幾からむ。受の途に於て大丈夫底の覺悟なき者は、爲すにだに堪へざらむとす、何ぞ成ることあらむ。

身を學藝に委ぬるもの、誰か生を終ふるまで人の批評を被らざる者あらむや。我思ふところあり、言ふところあり。人も亦思ふところあり、言ふところあり。我わが口を箝して人の言に就くこ

とを難しとせば、人をして其の舌を結んでわが意に従はしめむとするも、亦甚だ難からずや。所謂批評なるもの、我に加へらるるや、何人もこれを如何ともするなし。況や我の身死し、肉爛るも、日に新に、日に新に、批評の鞭笞をわが枯骨に加ふる士の蜂起、簇出せむも、亦未だ知るべからざるをや。この故に、平家の切禿の徒勞に屬せしを聞きて、未だ秦王の暴政の能く奏功せしを聞かず。

評の性は多く褒貶毀譽を具し、人の情は常に譽を愛し褒を愛して、毀を惡み貶を惡む。ここに於て毀譽褒貶のわが頭上に加へらるるや、大丈夫の覺悟なきもの、或は徒に懼れ、或は徒に驕り、或は人を恨み、或は自ら足れりとして、惜しむべし堂堂たる六尺の身、他人の簸弄する所となり了れるを悟らず、人を颯風にし、我を

糝糠にす。實に自ら待つ薄きのみならず、抑また學藝に負くこと多しといふべし。大丈夫豈斯くの如くなるべけむや。それ大海の百川を呑む、大も亦呑む、小も亦呑む。清も亦辭せず、濁も亦辭せず。日に黙黙たり、洋洋たり。而して漸くわが大を成し、徐にわが大を用ひ、日に活潑潑たり、圓陀陀たる大作用をなす。大賢の人の言を受くる、亦かくの如し。精雜・密疏の說、毀譽褒貶の評、皆一齊に之を受けて擇ばず、ただ片言隻語もわが知非の鑑、修治の因たるべきものの、我をして日に進ましむるあらむことを願はざることなし。

この故に、學藝に志すものは、能く外に受くる大賢の如くなる能はざるも、勤めて己に克つて人に受くべし。饒舌の分疏は牙婆の醜態、逆耳の言に聽かざるは好漢にあらじ。假令滿面の垢辱、堪

牛渡馬勃 韓退之の「進學解」に「牛渡馬勃、敗鼓之皮、俱收並蓄。」

へむとして堪ふる能はず、筋張り血湧き、劔を抜いて直に報いむと欲するに至るも、また先づ牙關を咬定して、隱忍し、頭を垂れ心を虚しくする底の工夫裏より、一天地を拓き得て、笑つて、立つて、謝して、牛渡馬勃をわが藥籠中に收むるが如くならむを期すべし。これを大丈夫の受の覺悟といふ。人貶すれば便ち受けずして、口嘮噪地に胡言亂説し、人讚すれば便ち默受して、欣欣たる如きは、閨閣の兒女に在つては咎むべくもなし、學藝の士に在つては甚だ鄙しむべしとす。古に曰く、峻谷に入るものは當に葛藟を攀ぢて以て顛墜を免るべし、時俗に處るものは當に道義に據りて、然して後以て自立するを得べしと。學藝に遊ぶものは當に反求の功に頼るべし、漸く深造するあらむ。ただ反求の功に頼る、則ち揚げらるるも自滿せず、抑へらるれば愈奮ふに足らむ。

謙謙たる君子は卑うして以て自牧す。韓信は戰ひ勝ちて猶敗餘の敵將を禮するを忘れず。一武夫の得意の時に於けるだに、好漢のなししところ彼の如きものあり。況や學藝の濱に立つて、纔に文具の半片を拾ひ飛沫の一滴に浴するの我に於てをや。謙の道學ばざるべからざるなり。

大丈夫まさに、受發の二途に於て大丈夫底の覺悟を以て立ち、而して學藝に盡すあるべし。子思曰く、能く其の心に勝つ、人に勝つに於て何かあらむ。能く其の心に勝たず、人に勝つを如何せむ」と。書を著はして美とせられず、内に求めずして人に責むる、その情は憫むべし、その爲は悲しむべし。我豈人の勝つことを好むを陋とするのみならむや、我また實にこれを愧づ。倣はむかな海や、百川それ海を如何せむ。

子思 孔子の孫、「中庸」を著はす。

「調言」

安倍能成 哲學者。
東京帝國大學文科
大學哲學科出身。
現に京城帝國大學
教授。

醫書に云云、「論語」
程註に「方書手足
痿痺爲不仁」

九 生命と愛

安倍能成

醫書に手足の麻痺せるを不仁といふさうである。これは實に面白い説明である。要するに、仁といふは生きて居るといふことである。恰も國語で恩即ち恵とは芽ぐみにして、天地生生の氣を意味して居るのと符合する譯である。芽ぐみといふ詞の中には、動いて止まざる生命の心が、如何にも直觀的にまざまざと顯れて居る。されば、若し本來の意味からいふならば、恵とは殊更に上より下に向つてする救助の意識を以て行はれることではない。生命が生命を助け、育て、長ぜしめることは、生命その物に自然に具はつた働である。それは他の爲にする働でなくして、自分の働がおのづからに他の爲になるのである。草木の芽ぐむ働は、草木

自身の働である。しかもこの生命は、やがて又萬物を生かす生命ではないか。

太陽は自ら輝くと同時に萬物を照らす。それ自身偉大なる生



命たる太陽は、同時に萬物の生命の母である。草木は雨露の「めぐみ」を受けて、芽ぐむ。雲は無心にして岫を出て、下つて雨となる。しかも雨露に籠る生命は、發して草木を芽ぐます力

とならざるを得ない。それは草木、雨露が畢竟同一生命の現れであるが故に、始めてかくの如くなるを得るのではないか。ゲーテが言つたといふ、人間の眼が太陽を見得るのは、人間の眼が太陽と同じやうなものだからだといふ意味の語は、非常に味の深い

ゲーテ ドイツの大
詩人。(西曆一四九一
一八三二)

語である。更に進んで考へれば、太陽と雨露とが萬物の母たり得るのは、萬物悉く太陽や雨露と同じ性を有するからである。萬物を生かす生命は、畢竟太陽や雨露自身の生命だからである。

他人は知らず、自分の最も病とするところは、この生命感の稀薄になることである。この生命感が稀薄になる時、自分は十分に他の生命と交感することが出来ない。自分の周囲の一切は、何だか重苦しい鈍い物質的な感じを以て、自分の上へのしかかつて来る。こんな時には、自分はもうただ自分の意識が全然無感覺になつて、ひたすらに安き眠に就かうとする甚しき生命の倦怠と、他方に於て、この状態に安んずることの出来ない焦燥とを合せ感ずるのである。自分は内に省みてこの生命感の稀薄を思ふ時ほど、自分の生きがひなさを感ずることはない。自分といふも

の全體が一種の鈍感状態、即ち不仁の状態になるといふことほど、自分にとつて厭はしいことはない。これは自分に取つて何よりも堪へ難いことである。自分は自分の生活に時々見舞ひ來るこの状態を感ずる時ぐらゐ、自分を不幸と思ふことはない。

生命は生命と交感する。しかも物に向つて生命を感得する人は、決して固定凝滞の状態に於てそれを見ることはない。ささやかな若芽を見てそれに生命を感ずる人は、これを愛せざるを得ない。さうして、この芽の中に、それが更に延び延びて、やがては日光を遮る大樹となる生生の力を感ぜざるを得ない。さうして、その人の生命が、力強く、大きく、博いほど、その生命はささやかなる生命をも遺すことなく見出すのではあるまいか。それは小さな谷川のささやきの中にも、已に大海のトリトンの響を偲ぶであ

トリトン ギリシア
神話に見える半人
半魚にして貝を吹
く海神。

らう。それはまた、固い固い岩の中にも、ひそかに流れる水脈を感じ出すであらう。それは、自分の生命に向つて逆らふ力の中にも、亦自己を育てる生命を見出すであらう。かくてそれは、罪の中に芥子粒ほどの存在を有する物の中にも、救を見出すであらう。

自分の終生の願は、實に自分の中にある生命を出來得るだけ力強く深く博くして、さうして、自分の中に自分以外の、しかも自分と決して他人よそびとならぬ生命を感受し攝取したいといふことである。自分はこの道に進むにあつて、自分の中に、多くの掘穿つて除去すべき固まつたもののあることを感ずる。自分はその何とも知れず黒い堅いものの、自分をおしつける鬱陶しさに苦しみつつ、それを打碎き、押開く時のすがすがしさを想はざるを得ない。

「山中雜記」

一〇 幻住庵の記

松尾芭蕉

松尾芭蕉 俳人。
名は宗房。伊賀の人。元禄七年(二三三)没、年五十一。
石山 滋賀縣滋賀郡石山村大字石山。そこに有名な石山寺がある。
岩間 同村大字内畑にある岩間山正法寺。
國分山 同村大字國分にある。

何某 膳所藩士。俗稱本多八郎左衛門といひ、探山居士といつた人。
曲翠 芭蕉の門人。

石山の奥、岩間のうしろに山あり、國分山と云ふ。そのかみ、國分寺の名を傳ふるなるべし。麓に細き流を渡りて、翠微に登ること三曲二百歩にして、八幡宮立たせ給ふ。神體は彌陀の尊像とかや。唯一の家には甚だ忌むなる事を、兩部光を和らげ、利益の塵を同じうし給ふも亦たふとし。

日頃は人の詣でざりければ、いとど神さびものしづかなる傍に、住捨てし草の戸あり。蓬根笹軒を圍み、屋根漏り、壁落ちて、狐狸臥處むとを得たり。幻住庵と云ふ。あるじの僧何某は、勇士菅沼氏、曲翠子の伯父になむ侍りしを、今は八年ばかり昔になりて、正に幻住老人の名をのみ残せり。予また市中を去ること十年ばかりにし

象潟 秋田縣由利郡象潟町。昔は松島と並稱され、風光明媚の地として著名であった。
湖水 ここでは琵琶湖なす。

やがて出でじ云云 西行法師の歌「吉野山やがて出でじと思ふ身を花ちりなばと人や待つらむ」

唐崎 滋賀縣滋賀郡にある名所。
笠取 京都府宇治郡にある村名。

三上山 滋賀縣野洲郡にある山。
田上山・小竹生ヶ嶽 同縣栗太郡にある山。

腰袴 同縣滋賀郡にある山。
黒津 同縣栗太郡に屬する地名。

網代守る云云 古歌「田上や黒津の庄のねこなとこ網代守るとて色の黒さよ」

海棠の云云 「山谷集」に「徐老海棠集上、王翁主簿峯庵。」
虱を捫つて坐す 王

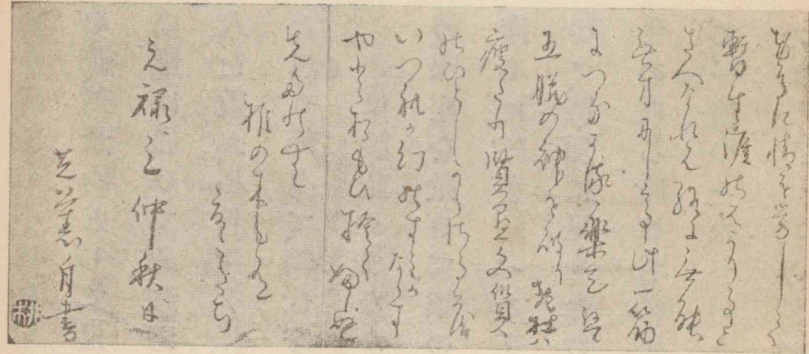
荆公の詩に「捫虱對青山、挾書眠北闕。」
とくとくの雫 西行法師の作と傳へる歌「とくとくと落つる岩間の苔清水汲みほすひまもなき住居かな」

て、五十年やや近き身は、蓑蟲の蓑を失ひ、蝸牛の家を離れて、奥羽象潟の暑き日に面を焦がし、高すなご歩み苦しき北海の荒磯に踵を破りて、今歳湖水の波に漂ふ。鳩の浮巢の流れとどまるべき蘆の一本の蔭たのもしく、軒端葺きあらため、垣根結ひそへなどして、卯月のはじめ、いと假初に入りし山の、やがて出でじとさへ思ひそみぬ。

さすが春の名残も遠からず、躑躅さき残り、山藤松にかかつて、時鳥しばしば過ぐる程、宿かし鳥のたよりさへあるを、啄木鳥のつつくとも厭はじなど、そぞろに興じて、魂は吳楚東南にはしり、身は瀟湘洞庭に立つ。山は未申に峙ち、人家よき程に隔たり、南薰峯よりおろし、北風海を浸して涼し。日枝の山、比良の高嶺より、唐崎の松は霞こめて、城あり、橋あり、釣垂るる舟あり。笠取に通ふ木樵の聲、麓の小田に早苗とる歌、螢飛びかふ夕闇の空に水雞の叩く音、美景物として足らずといふ事なし。中にも三上山は士峯の面影に通ひて、武藏野の古きすみかも思ひ出でられ、田上山に古人を數ふ。小竹生ヶ嶽、千丈ヶ峯、袴腰といふ山あり。黒津の里はいと黒う茂りて、網代守るととて詠みけむ歌の姿なりけり。

なほ眺望くまなからむと、うしろの峯に這登り、松の棚作り、藁の圓座を敷きて猿の腰掛と名づく。かの海棠に巢をいとなび、主簿峯に庵を結べる王翁徐恠が徒にはあらず。ただ睡癖山民となつて、辱顔に足をなげいだし、空山に虱を捫つて坐す。たまたま心まめなる時は、谷の清水を汲みて自ら炊ぐ。とくとくの雫をわびて、一爐のそなへいと輕し。はた昔住みけむ人の、殊に心高く住みなし侍りて、巧み置ける物ずきもなし。持佛一間を隔てて、夜の物

高良山 福岡縣三井郡にある山の名。但しその山上に高良明神あり、昔は神宮寺もここに一緒にあつた。
甲斐何某 藤木甲斐守教直。



(節一の記の庵住幻) 蹟筆蕉芭尾松

をさむべき處など、いささかしつらへり。さるを、筑紫高良山の僧正は、加茂の甲斐何某が巖子にて、このたび、洛に上りいまそかりけるを、或人をして額を乞ふ。いとやすやすと筆を染めて、幻住庵の三字を送らる。やがて草庵のかたみとなしぬ。すべて、山居といひ、旅寢といひ、さるうつは蓄ふべくもなし。木曾の檜笠、越の菅蓑ばかり、枕の上の柱に懸けたり。
晝はまれまれ訪らふ人人に心を動かし、あるは宮守の翁、里のをのこども入り來りて、猪の稻くひあらし、兎の豆畑に通

佛籬祖室の云云 嘗て江戸の深川に住んでゐた頃、佛頂禪師に參禪したことをいふ。
樂天は云云 白樂天の詩句に「詩役五臟神。」
老杜は云云 杜甫の詩句に「知君苦思緣、詩瘦。」

ふなど、わが聞きしらぬ農談。日既に山の端にかかれば、夜座しづかに、月を待ちては影を伴なひ、燈を取りては罔兩に是非をこらす。かく言へばとて、ひたぶるに閑寂を好み、山野に跡を隠さむとにはあらず。やや病身人に倦みて、世を厭ひし人に似たり。
つらつら年月の移りこし拙き身のとがを思ふに、一度は仕官懸命の地を羨み、ある時は佛籬祖室の扉とほそに入らむとせしも、たよりになき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞じて、暫く生涯のはかりごととさへなれば、終に無能無才にしてこの一筋につながる。樂天は五臟の神をやぶり、老杜は瘦せたり。賢愚文質の等しからざるも、何れか幻のすみかならずやと思ひ捨てて臥しぬ。
先づたのむ椎の木もあり夏木立

吉田絃二郎 文學者。名は源次郎。早稲田大學英文科出身。元同大學教授。

一一 故郷

吉田絃二郎

故郷は私たちにとつて山上の白雲だ。私たちの魂の休息所だ。故郷の墓、それは叢に埋もれがちな小さな墓である。けれども、

不思議に旅人の心を惹く。



吉田絃二郎

恐らく、今は鼓子花や雑草が墓の周圍を包んでゐることであらう。近くの葦の中には、行行子も啼いてゐることであらう。關はりなき人人に

とつては、それは捨てられた路傍の石に過ぎないであらう。けれども、旅に在つてたまたま故郷を懷ふ者にとつて、それは魂のただ一つの據りどころでもある。



〔行行子〕

故郷の墓、丘の上の墓、耕作地の片隅の墓は、幾百里の旅を續けて歸り行く旅人に對しても、木の葉一つ戰がしてはくれぬ。石は冷たく、土は苔に掩はれ、手向の花は枯れはててゐる。疲れた心を抱いて故郷の墓前に立つ時、旅人の心は傷られる

けれども、不可思議な力で私たちの魂を喚ぶものは、ささやかな故郷の墓である。秋になつて稻の穂のうなだれるころ、曼珠沙華の花の咲くころ、野菊の小徑を迎るころ、旅人は故郷の墓を思ふ。そこに眠れる人人を想ふ。

父、祖父、曾祖父、未だ嘗て見ざりし祖先たちの、嘗て呼吸し、嘗て歩み、嘗て思惟したであらう故郷を思へば、路傍の小川も、山の小徑も、尊い程に映る。

百年の昔、二百年の昔、曾祖父、更に遠い先祖たちの呼吸したて



〔曼珠沙華〕

あらう山の空氣も、さながらに感じられる。

野茨の徑、野菊の路、夏の雲、立秋の山、すべて故郷の墓に眠れる人人のものであつた。黙黙として地に耕した父、黙黙として機を織つた母も、故郷の山を、死ぬる日まで、ただ一つの據りどころとして生きてゐた。

片丘の躑躅は日本一であり、流の香魚も日本一であり、枇杷も稲も日本一であつた。山も川も季候も日本一であつた。父も母もしか信じつつ生きてゐた。恐らく、先祖たちもしか信じつつ生きてゐたことであらう。その日本一の故郷に、今は父も母も先祖たちも靜かに眠つてゐる。

わが故郷は平凡な故郷である。雲仙を南に眺め、有明の海を葦の葉越しに見、濁れる大河を東に控へ、蚊多く、霜深く、行けども行

雲仙 長崎縣島原半島にそばだつ活火山。現に國立公園。最高峯普賢岳は海

抜一三六〇米。有明の海 島原半島と天草島との間から北方に灣入してゐる内海。

けども濠深く、沼廣く、菱の花白く、道きはまるところを知らぬ平野の中の寒村である。けれども、年年に故郷を戀ふる心は切切としてわが胸に迫り來り、恐らく、やがてはわが平凡なる故郷を、私も亦日本一の故郷と思ふ日が來るであらう。

山のたたずまひ、水の姿には、取別けて言ふこともない故郷の山川も、父母の墓を思ふ時、私にとつては最も懐かしい山となり川となつて現れる。

七月の山は輝き、白雲は漂ふ。日本、到る處の山べに、川べに、野べに、海べに、そこには懐かしい故郷があり、墓がある。嘗て黙黙として耕し、黙黙として人生を思惟した人人が、その冷たい墓の下に眠つてゐることを想へば、何處の山べも、何處の川べも、何處の野べも、何處の海べも尊い。

「小草にささぐ」

伴蒿蹊 歌人・國學者。名は查芳。近江の人。文化三年(一四六六)歿、年七十四。

二 納涼

伴 蒿 蹊

土さへ裂けて照る日もやうやうかくろひゆくころ、少し息出づるここに、ゆあみいそぎて、はしるすれば、よその夕だちのあまりならし、一すぢ吹きおこせたる風の袂をかへせば、あふぎもうちおきて、何ごころなくうそぶくほどに、暮れはてぬれば、かきもはらはぬ庵の草むらの、晝間はむさむさしげなるも、ところえてむすべる露の、玉なしてさらさらと見ゆるに、秋をならせる蟲のしのびやかに鳴きいでたるこそ、心ゆくかぎりなれ。

夕月はいつしか隠れたるに、いづこよりうかれきぬらむ、時過ぎたる螢の一つ二つ飛びわたるもをかしと見るほどに、心知れる友の引きつれて訪はるるが、おもひがけずめづらしきにしも、まづこのごろの暑さをぞいひしろふ。

いとせめてけづり氷になぞらへむとて、水にひたせるくだものいだしたれば、「いぎ、その氷室のわたりはいかならむ、また白波のまなく來寄する渚もゆかし。」といひいづる人あるに、何か、その海山のけうときところは、ゆく道のほどにたふれなむかし。近きをおもひめぐらすに、ただ糺をもとにて、加茂川のながれは人ごとにきそひ遊べば、なかなか水さへぬるむべかめり。西川こそいづこもよからめ。「といふ、あながちに河べならずとも、木だちものふり、やり水のおとなひしづかに聞ゆるところあらましかば。」ともいふ。

「いな、そは夏のみかは、世の塵のいたらぬところは、いつも羨まれぬるものを。」とあらがふに、また、夕がほ棚の下涼みに、人め恥づ

糺 加茂川と高野川との合流するところ。その川原を糺川原といひ、その森を糺森といひ、古來時鳥と納涼とを以て名高い。西川 京都の西部を流れる桂川の異稱。
夕がほ棚の云云 出處不明の古歌「樂しみは夕顔棚の下涼み男はててら女は二布して」

巨椋の江 京都市伏見區の南部にあつて、周回一六軒に及ぶ池。昔の大湖沼の名残といふ。

るともなきさまして、はたつものたなつもの物がたりせむは羨ましからずや。」といへば、中におとなしき人の、おのれらもかう訪ひかはして、こころおかず語らふは、その夕がほのかげにおとらむやは、ただまことに涼しかるべきものはこころなり。身のほどほどにしたがひ、むさぼらず、やぶらず、富めるもまどしきも、あめのまにまに私のおもひをけちてなむ、おのれに恥づるところなくば、いともすがすがしからざらめや。」といふに、あるじの翁はうなづきながら、いたうこそことわりだちたれ、深くは論ぜてあられな。そのこころのたとへにもすなる、蓮の花なむ巨椋の江よかめり。小船よそひて朝すずみに見はやさむの契あるを、ともにおはせかし。」といへば、誰もかく聞くはまづ涼し。」とよろこぶ。

「閑田文章」

厨川白村 英文學者。文學博士。名は辰夫。京都府の人。東京帝國大學文科大學英文學科出身。京都帝國大學教授。大正十二年歿、年四十四。

一三 文藝の基礎

厨川 白村

鐵石相打つ處に火花が散る如く、奔流岩に堰かれる處に飛沫が虹霓をなすと同じく、二つの力の衝突する處に、美しく華やかな人生の萬華鏡、生活の種種相が展開



厨川白村

される。方向を異にした二つの力が相觸れ相打つ葛藤がなければ、我等の生活、我等の存在は、根本に於て意義を失ふ。生の苦悶あるが故に、又戰の苦痛あるが故に、人生には生きがひがある。かの權威に屈服し、因襲に束縛せられて、羊の如くこれに甘んずる醉生夢死の徒などの、未だ曾て感得し味到し得ざる心境、即ち人生の深い興趣は、要するに

強大な二つの力の衝突から生ずる苦悶懊惱の所産に外ならぬ。私は文藝の基礎をも、この點に立つて解釋すべきであると思ふ。さらば、人生に於ける二つの力の衝突とは何か。

電光の如く、奔流の如く、驀地に、殆ど盲目的に突進して已まない生命の力を以て、人間生活の根本と見ることは、近代思想家の多くが一致する所である。凝固停滯を厭ひ、苟合屈服を避け、自由解放を求めて已まない生命の力は、意識的にも亦無意識的にも、絶えず内より我等の心胸を熱しつつ、その奥深くに烈火の如くに燃上つてゐる。この炎炎たる力を外から十重二十重に蔽うて、巧に全體を運轉させてゐるのが、我等の外的生活であり、經濟生活であり、又社會といふ有機體の一員としての生活である。

我等の生命は、天地萬象に普遍的な生命である。併し、この生命の力が、或個人に宿つて、その人を通じて現れる時、それはやがて個性となつて活躍する。内に燃える生命の力が、個性として發揮される時、即ち人人が自己の個性を表現しようといふ内的要求に迫られて動く時、そこに眞の創造の生活がある。故に、自己生命の表現は個性の表現であり、個性の表現は創造の生活であると言ひ得る。人間が眞に生きるといふことは、この個性の表現、創造の生活をする處にこそ見出されるのである。社會全體から見ても、各個人銘銘にその個性を十分に發揮するのてなければ、眞の文化生活は成立たない。かくの如き意味に於ける生命力の發動、即ち個性表現の内的要求は、我等の靈と肉との兩方面に於て、種の生活現象となつて現れる。即ち、時にそれは本能生活となり、遊戯衝動となり、或は強烈な信念となり、高遠の理想となり、學徒の

知識慾となり、又英雄的征服慾ともなる。更にそれが哲人の思想活動となり、詩人の情熱・感激・憧憬となつて現れる如き場合には、最も強く、最も深く、人類を動かすのである。

但し人間の生活はさう單純ではない。自由不羈を求め、生命を以て十分に飛躍せしむべく、又思ふままに個性を發揮せしむるには、我等が社會生活は餘りに複雑であり、人間その物の本性も亦餘りに多くの矛盾を内に藏してゐる。殊に近代社會の如く、制度・法律、その他のあらゆる機關が完備し、又一方には生活難といふ脅威が存在する以上、我等は意識的にも無意識的にも、この抑壓から脱する譯には行かない。かくの如く内に動かうとする個性表現の慾望があれば、これに對して外から絶えず社會生活の束縛・強制が迫る。此等の内外二つの力の間、に苦悶する状態

が、即ち人間生活である。

併し、以上の言は、單に自己と外界との關係からのみ言つたもので、二つの力の衝突が、必ずしも單に自己の生命力と外部からの強制・抑壓との間に起るとのみは言はれない。人間は既に自己その物の内に、互に矛盾した要求を持つてゐる。例へば、私どもは飽くまで個人として生きたいといふ慾望を持つてゐながら、同時に家族とか、社會とか、國家とかいふものに、調和して行かうといふ慾望をも持つてゐる。一方に自由に自己の本能を満足させたいといふ慾求があると共に、他方にはさういふ本能を抑壓しようといふ慾求をも抱く。假令外部からの法則や因襲に縛られずとも、自己の道德によつて自己の慾求を抑へよう律しようとするのが人間である。その一方を生命力であると言ふならば、他

の一方も亦やはり生命力の發現に相違ない。かくして、精神と物質、靈と肉、理想と現實の間には、絶えざる矛盾があり、不斷の葛藤がある。故に、生命力が旺盛であればあるほど、この不調和、この葛藤は、激烈であるのが當然である。

かくの如き相反する力の葛藤は、内的生活に於ても、外的生活に於ても、古往今來總ての人間が經驗する所の苦悶である。この苦悶に堪へないで、自暴自棄に陥るか、或は絶望の極、生を否定し去つて自殺するものの場合の外は、人間は總て何とかしてこの苦悶に打勝ち、この混亂を切抜けて突進しようとする。かくして、私どもの生命力は、宛ら岩に堰かれた奔流の如くに、淵をなし、瀬をなし、瀑をなして、紆餘曲折した行路を取らざるを得ない。或は、馬を陣頭に立てて、雲霞の如き敵の大軍を蹴散らしつつ、勇往猛

進する勇士の如き辛酸をも嘗めるのである。そこに生きようとする努力があると共に、人生の興味も亦生ずる。より良い、より高い、より自由な生活を創造すべく、人は不斷の努力を續けてゐる。だから、生きるといふことは、何等かの意味に於ての創造である。工場に働くのも、事務所仕事をするのも、野に耕すのも、市に賣るのも、皆等しく自己の生命力の發現である以上、程度こそ異なれ、何れも創造生活であることは否定されない。併し、其等の種々な生活活動の中で、絶對無條件に純一無雜な創造生活を營む世界がここに唯一つある。それは即ち文藝の創作である。

文藝は純然たる生命の表現である。外界の抑壓・強制から全く離れて、絶對自由の心境に立つて個性を表現し得る唯一の世界である。名利を忘れ、一切の羈絆・制縛から放たれて、そこに始めて

文藝上の創作は成立するのである。ただ自己の心胸に燃える感
激と情熱によつて、天地創造の朝、神がなしたのと同じ程度の
自己表現を行ひ得る世界としては、獨り文藝があるのみである。
換言すれば、人間が一切の虚偽や苟合などを棄てて、純眞に生き
ることの出来る唯一の生活はここに在る。文藝が人間の文化生
活の最高位を占め得る所以は、實にこの點に在る。これに較べる
と、他の總ての人間活動は、みな吾吾の個性表現の働を多少とも
減殺し、畏縮させるものだと言つても差支ない。然らば、私が前に
述べたやうな、抑壓から來る苦悶・懊惱と、この絶對創造である文
藝とは、果して如何なる關係に立つのであらうか。

常に自由を求め解放を求めて已まざる生命力、個性表現の慾
望、人間の創造性を強調しようとする傾向は、最近思想界の大勢
である。これは、人間は自然の大法に左右され、機械的法則にのみ
支配されて、身動きの取れないものだと思つてゐた舊思想に對
して、自我と個性とを貴ぶ近代的精神が頓にその勢を得て、こ
に人間の自由創造の力が高調された結果だと思ふ。さうして、既
にこの生命力、この創造性を肯定する以上、私どもは、この力が、そ
れと反對の方向に動かうとする色色の力との間に生ずる衝突
を以て、人間苦の根柢なりと見做さざるを得ない。現に私どもは、
朝に夕に、この二つの力の衝突から生ずる苦悶・懊惱を経験して
ゐる。換言すれば、私どもが生きてゐるといふことは、即ちこの戰
の苦惱を繰返してゐるといふことに外ならない。生活が深けれ
ば深い程、生命の力が籠つてゐればゐる程、この苦惱は益々烈しい
のである。さういふ苦惱を経験しつつ、多くの悲壯な戰を敢へて

しつと、人生の行路を進み行く時、私どもは或は呻き叫び、或は怨嗟し號泣すると共に、時にまた戦勝の光榮を歌ふ歡呼と歎辭とに、自ら醉ふことさへ稀ではない。かうして、放つその聲こそは、やがて私どもの文藝に外ならない。痛手を負ひ、血みどろになつて、悶えつつも、又悲しみつつも、諦めようとして諦め得ず、思ひ止まらうとして思ひ止まることの出来ない程に、強い愛慕・執著を人生に對して持つ時に放つ、人間の呪咀・憤激・讚歎・憧憬・歡喜の聲こそは、即ち私どもの文藝ではないか。かくの如き意味に於て、文藝は眞善美の理想に向つて向上の一路を辿り行く生命の行進曲であり、又進軍の喇叭である。朗朗として響き渡るその聲が、天地を貫き、百代を動かす威力を持つ所以は、實にここに在る。

美の快感だの、趣味だのといふ、極めて消極的な暢氣な考で文

藝の基礎を解してゐたのは、過去のことである。文藝が若し俳茶の筵に過ぎないか、花鳥風月の楽しみであるか、或はお姫様の慰みにする綺麗事であるならば、いざ知らず、苟も文化生活の最高位に立つ人間活動である以上は、やはりその根柢を生命力の躍進に置いて解釋しなければならぬ。私は、文藝上に、ただ美しいだの面白いだのといふ快樂主義的藝術觀を、飽くまでも排斥したい。殊に、暢氣に遊んでゐては暮せない現代に生きる人の文學に於て、痛切にこれを感じる。甘い情話式のもの、不良兒の惡戯日記、文士生活の樂屋落、若しこんな物のみがわが文壇を横行するならば、それは疑もなく我等の文化生活の禍である。文藝は嚴肅にして然も沈痛なるべき人間苦の象徴であつて、斷じて玩弄物ではないのである。

「苦悶の象徴」

一四 新島守

本院 後鳥羽上皇。
土佐の院 土御門上皇。
佐渡の院 順徳上皇。

津の國の云云「續後拾遺集」和泉式部の歌「津の國のこやとも人をいふべきにひまこそなけれ葦の八重ぶき」藐姑射の山 上皇の御所をさす。霞の洞 仙洞ともいひ、上皇の御所をさす。

本院は六つにて位に即き給ひて、十四年おはしましき。おり給ひて後も、土佐の院十二年、佐渡の院十一年、なほ天の下は同じ事なりしかば、總て三十七年が程、この國のあるじとして萬機の政を御心一つに治め、百の官を従へ給へりしその程、吹く風の草木を靡かすよりもまされる御有様にて、遠きを憐み近きを撫て給ふ御めぐみ、雨の脚よりも繁ければ、津の國のこやのひまなき政を聞き召すにも、難波の葦の亂れざらむことを思しき。藐姑射の山の峯の松もやうやう枝をつらねて、千代に八千代を重ね、霞の洞の御すまひ、幾春を経て、空ゆく月日のかぎり知らずのどけくおはしましぬべかりける世を、ありありてよしなき一ふしに、

今はかく花の都をさへ立別れ、おのがちりぢりにさすらへ、磯の苦屋に軒を並べて、おのづからこととふものとは、浦に釣する

詠花有歡色和歌

後鳥羽天皇御宸筆
まききいかにふは
ちれしきなほこね
きあやなくそれ
うしとふかき

後鳥羽天皇御宸筆

あま小舟、鹽焼く煙の靡く方をも、わが故里のしるべかとばかり、ながめ過ぐさせ給ふ御すまひどもは、それまでと月日を限りたらむだに、明日知らぬ世のうしろめたさに、いと心細かるべし。まいて、何時をはてとかめぐり逢ふべきかぎりだになく、雲の波、煙の波の、幾重とも知らぬ境に世をつくし給ふべき御様ども、口惜しともおろかなり。

このおはします處は、人ばなれ里遠き島の中なり。海づらより

詠花有歡色一和歌
えたをたにふくはる風もならされはあやなくはなもうれしとやなもふ

柴の庵の云云「山家集」西行法師の歌「いづくにも住ま
れずばただ住まで
あらむ柴の庵のし
ばしなる世に」
水無瀬殿 後鳥羽上
皇が極めてこの地
を愛して設けられ
た離宮。その地は
今の大阪府三島郡
島本村に屬する。
二千里の云云 白樂
天の句に「三五夜
中新月色、二千里
外故人心。」
年もかへりぬ 貞應
元年(八三三)になつ
たことをいふ。

は少しひき入りて、山蔭にかたそへて、大きやかなる巖のそばだ
てるをたよりにて、松の柱に葦葺ける廊など、けしきばかりこと
そぎたり。まことに、柴の庵のただしぼしと、かりそめに見えたる
御宿りなれど、さる方になまめかしく、故づきてしなさせ給へり。
水無瀬殿おぼし出づるも夢のやうになむ。はるばると見やらる
る海の眺望、二千里の外も残りなき心地する、今更めきたり。汐風
のいとこちたく吹きくるを聞き召して、

われこそは新島守よおきの海のあらき波風こころして
吹け

年もかへりぬ。處處、浦浦、あはれなる事をのみ思し歎く。佐渡の
院、明けくれ御行をのみし給ひつつ、猶さりとともと思さる。隱岐に
は、浦よりをちのはるばると霞み渡れる空を眺め入りて、過ぎに

し方かきつくし思し出づるに、行くへなき御涙のみぞとどまら
ぬ。

うらやましながき日影の春にあひて、汐くむあまも袖や
ほすらむ

夏になりて、かやぶきの軒端に五月雨の雫いとところせきも、
御覽じ馴れぬ御心地に様かはりて珍しくおぼさる。

あやめ葺くかやが軒端に風過ぎてしどろに落つるむら
雨の露

初秋風のたちて、世の中いとどものがなしく、露けさまさるに、
いはむ方なく思しみだる。

ふるさを別れ路に生ふる葛の葉の秋はくれどもかへ
る世もなし

七條の院 後鳥羽上皇の御母。

たとしへなく眺めしをれさせ給へる夕暮に、沖の方に、いと小
さき木の葉の浮べると見えて漕ぎくるを、海人の釣舟かと御覽
ずる程に、都よりの御消息なりけり。墨染の御衣、夜の御ふすまな
ど、都の夜寒に思ひやり聞えさせ給ひて、七條の院よりまゐれる
御文、引きあけさせ給ふより、いとみじく御胸もせきあぐる心
地すれば、ややためらひて見給ふに、あさましくも、かくて月日經
にけること。今日明日とも知らぬ命のうちに、今一度、いかで見奉
りてしがな。かくながらは、死出の山路も越えやるべうも侍らで
なむ。など、いと多く亂れ書き給へるを御顔に押當てて、

たらちねの消えやらで待つ露の身を風よりさきにか
で問はまし

八百萬神もあはれめたらちねのわれ待ちえむと絶えぬ

玉の緒

初雁のつばさにつけつつ、此處彼處よりあはれなる御消息の
み常に奉るを御覽ずるにつけても、あさまじういみじき御涙の
もよほしなり。家隆の二位は、新古今の撰者にも召加へられ、おほ
かた歌の道につけて陸まじく召仕へし人なれば、夜晝こひ聞ゆ
ること限なし。巻きかさねて、書きつらねまゐらせたる、和歌所の
昔の倂、かずかず忘れがたう。など申して、つらき命の今日まで侍
ることの恨めしきよしなど、えもいはずあはれ多くて、

寝ざめして聞かぬを聞きてわびしきは荒磯なみのあか
つきの聲

とあるを、法皇もいみじと思して、御袖いたく絞らせ給ふ。

一著者未詳、増鏡

家隆 從二位藤原家隆。

上田秋成 國學者・小説家。大阪の人。文化七年(一八二七)歿、年七十八。

文治その年の 文治二年(一八四六)鎌倉の大將殿 右大將源頼朝。鶴ヶ岡の宮居 鶴岡八幡宮。

一五 月の前

上田 秋成

文治その年の秋八月十五日、鎌倉の大將殿、鶴ヶ岡の宮居に詣でさせ給ふ。例の事にて、御供仕うまつる人人、御前追ひ、御後べ仕うまつれり。渚に遊ぶ蘆鶴のあゆみして、疾からず、遅からず、列を亂さず、練りいでさせ給へるを、大路に膝折りふせ、畏み奉る人数多あるに、警衛して「あな」とだに言はせず、世にいかめしく尊き御有様なり。

廣前を罷りて、御手輿に召させ給ふほど、御階の忌垣のもとに畏まり居る法師の見上げ奉る面つき、旅に飢ゑていと瘦せ黒みたるに、衣杖笠なども乞食者の様したるを、鋭き御目尻にとどめさせ給ひ、ただ人ならずや思しけむ、あの法師が修行するやう、名

をも問へ。」と仰せ給ふ。御輿ぞひの若侍、急ぎ走り寄りて、「有り難く御目賜へり。何處よりの修行ぞ。名をも申せ。」と言ふ。ゆくりなきに驚きたる顔して、雲水に在處定めず侍るものにて、名は圓位と申す。」と言ふ。聞き召されて、さればこそ聞知りたれ。穴熊の猛き獲物の類ならで、賢き人得たるためしに誘ひ歸らむ。わが後につきて來れと言へ。」とて、召連れさせ給へり。

御館に入らせ給ひ、御装束あらためさせ給へば、やがて大となぶら數多照らし挑げたり。今日の道ゆきづと率てこ。」と仰せ給ふ。「法師まゐれ。」とて、御座近き簀子に召されたり。大將殿見おこせ給ひて、昔は藐姑射の山の御宮仕せし人の、世をはかなきものに思ひしみて、身は黒く寔したれど、月花の譽は物の心なき東人さへ聞知りたるぞ。八百日ゆく濱の真砂の中には、玉ども多く拾ひ納

穴熊の云云 「史記」に「西伯將出獵、トス。之。曰。所獲非龍、非蛇、非虎、非狼、非兎、非王、之輔。於。是。西伯獵、遇太公於涓之陽。」

八百日ゆく云云 「千載集」藤原長方の歌「八百日ゆく濱の真砂を敷きかへて玉になしつる秋の夜の月」

伊勢の海云云「續後拾遺集」大伴黑主の歌「伊勢の海の渚を清み住む鶴の千年の聲を君に聞かせむ」

めたらむを語りて聞かせよ。」と仰せ給ふ。いみじく畏まりて、いと
も輝かしきにぞ、ただ夢路を辿るやうに侍りて、聞え奉るべき事
も侍らぬ。さとき御眼に見あらはされて侍るこそ、いと有り難
けれ。伊勢の海清き渚におり立つならひは侍れど、よろしき貝を
だにえ拾ひ侍らねば、これとて捧げ奉るべくもあらず。君にも豫
て學ばせ給ふと漏り聞き奉る。天の下まつりごち給ふ御器の大
いなるに思し寄せ給ふには、かけても及ぶまじきをさへ思ひ
知り侍り。大空に羽うちて飛ぶ鶴の聲、霜枯の淺茅が下の蟲の音、
いかで取りなめて聞え上ぐべき。あな畏し。」と申す。
打笑ませ給ひ、弓取りし人の元の心の猛きには、詠む歌も直く
あからさまにと聞くは實か。歌は武士の荒荒しき心には詠み得
まじきものに、宮人たちは沙汰し給へりとや。軍に出て立ちて、笛

大風起り云云 漢の高祖の句。
烏鵲南に 魏の曹操の句。

鼓の音、馬の嘶は物とも思はぬを、この三十文字あまりの學びに
は心の後るるは如何に。「こは畏き御心にも思し惑はせ給ふもの
か。古の代代の御門は、馬に鞍おき、弓矢取らして、軍に立たせ給ひ
し、その御歌を讀み見奉れば、猛く直直しく、調べもいと高しとこ
そ打聞き侍れ。いでや、歌詠まむとは、益荒男の心を取隠し、あて
になよびかにのみ詠出でまくするこそ、この道のいみじき煩な
れ。君が敏く猛き御心のままに打詠ませ給はむには、今の世の人、
誰かは並びあへ奉らむ。三尺の劔を取りて、「大風起り雲飛揚す。」と
歌ひ、樂を横たへて、「烏鵲南に。」と詠ぜし君達は、鞍の上にて文に遊
ばせ給ふならずや。玉造等がいみじく磨りみがきたるも、染殿の
八入の色も、はかなき目うつりばかりは何にかは、されど、谷深き
鶯の聲、信濃路出づる荒駒の歩み、何れの道、何れの業にも、始より

優れたらむは鬼にこそ侍らめ。」と言ふ。

「人人、あれ聞き給へ。世は捨て遁れても、頼もしき人の心ならずや。圓位よ、汝が遠つ祖の秀郷といひしは、世にいみじき弓の上手となむ聞ゆる。傳へたる事もあるべし。かくこそと思ひしみぬる事は忘れずてぞあらむ。事一言にても教へ承らばや。」こは益、恐ある御問はせなり。御物語のはてはては、武士の道しばしも怠らせ給はぬ御心より、野山を住處の瘦法師にだに問はせ給ふ事の忝けなさよ。向ひ奉りては、をこがましく、何をかは家の傳はりなどとして聞え奉るべき。まして有り難き大宮仕を否み奉り、親たちの慈しみをさへ仇なるものに思ひなして、年僅に二十三にして家を出でたるいたづら者の、弦引かむ術だに心にも留め侍らず。只一言の忘れ難きは、賞を重くし、罰を軽くせよと言ひしと、任ずる

士卒の云云「史記」に見える吳起の故事。

龜を減じて云云「史記」に見える孫臏の故事。

者を辱かしむれば危しと言ひし事とのみ、病める士卒の疽を吮ひしは、人の心をよく買ひなすと雖も、眞の情よりも覺え侍らず。寵を減らして人を危きに陥るるは、將帥のさかしきにて、國を治め天の下を知るべき。君の御心にあらず。さはれ、軍を出し給へる事の怪しきまで賢くおはするを、餘處ながら聞き奉るには、この方の御問はせ、免させ給へ。」とて、額を板敷に擦りつけて申す。

君笑み誇らせ給ひ、口とく、心さとき法師なり。今宵は月見る夜ぞ。人人と土器取りはやし、曉かけて遊ばむ。客人は酒飲まざるべし。鹿猿の中に立交りて歌詠めといふとも詠むまじ。只わが前にて遊べ。飽かず飲み、物きたなげに食ひ散らす。人人は暖かにもこそ。風冷やかなるに、この火とり法師に參らせよ。」とて、白銀をもて作れる猫の形したるを取りつたへて、君より賜はず。とて前に置

きたり。鹿猿はなほ心たけし。鼠をだにえ捕らぬ。瘦法師がためには、げに似つかはしき御賜物ぞ。」とて、三度おし戴きぬ。

翌朝御暇賜はりて立出づるに、御館の人やどりに、誰人の童ならむ、括袴の裾朝露に濡れそぼちて、いと寒げに居るを見て、「これ取らせむ。火埋みて、手足あたたためよ。」とて、かのきらきらしき物を與へて、顧みもせて立去りぬ。童打驚きて、「これ見給へ、見も知らぬ法師の見も知らぬもの賜ひつるは。」とて、青侍に見すれば、目口をはだけ、かく尊き寶物を誰かは得させむ。拾ひやしつる。」と言ふ。更に更に、道の空にかかる物やはあるべき。あな恐し。殿に奉りて給へ。」と言ふ。やがて御館にもて参り、仕ふる君を呼出でて、しかじかの事をむと申す。いと怪し。大將殿の法師に賜ひしを、いかで童には得させけむ。いぶかし。」とて、まづ急ぎて聞え奉る。君、打笑み給ひ、

「かの似而非法師、あなづらはしく、幼げなる物くれしとて、腹立たしくや思ひけむ。わが門の前に捨てゆきつるよ。法師とても男魂なくば、修行もえせぬなるべし。世を捨てて猶はかなき名利を忘れず、才に誇りて野山にまじり歌詠みてのみあるは、やがて世にも人にも捨てらるべき淺ましきぞかし。一度似而非者の手に穢れし物、その童に取らせよ。」とて取りおろさせ給ひぬ。

西行、後にこの事を人に語りていふ。右府はまことにねぢけたる君なり。口には蜜あれども、心には針のおはするぞ。漢高の大度、曾孟徳の智略あるに似て、天下の人、皆この君の網の中に入れられたるは、佛の冥福といふことを生れ得給ひけむ。ただ悲しむべきは、神の御裔の、この後やうやう衰へさせ給はむ世の姿なるは、とて、涙とどめ難くして物語りしとなむ。

「藤葉冊子」

漢高 漢の高武帝。

曾孟徳 魏の武帝。

加藤千蔭 國學者、
歌人。江戸の人。
賀茂真淵の門下。
文化五年(三四六)
歿、年七十四。

石濱 今の東京市淺
草區橋場町の地。

秩父の山 埼玉縣秩
父郡の奥に連なる
山脈。

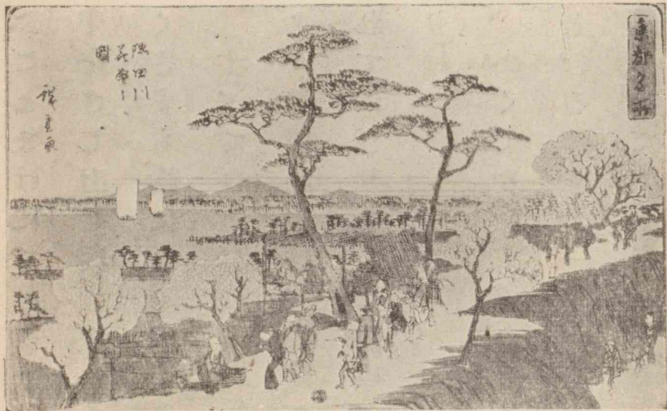
一六 隅田川の秋雨

加藤 千蔭

葉月二十日あまり、秋のけはひのなつかしくて、例の隅田川の
ほとり、石濱のいほりに行きて宿りぬ。有明の月のにほひも、霧た
ちわたる曉のさまも、ところから世に似ぬものから、ここは雨の
そほ降る日なむ殊にあはれは深かりける。

もとより萱ふける庵なれば、音だになくて、軒の雫の三つ四つ
落ちそむるより、籬の萩の下葉の色づきたるが、ほろほろと散る
もあはれなり。水のおもては動くともなくて鏡の如くなるに、雲
の濃き薄きうつろひて、かつ浮びかつ消ゆる水沫にこそ、雨のけ
はひはしるかりけれ。水脈みづなの一すぢは、さしひく汐にもまじらて、
とはに花田の色に流れいにて、沖に出づめり。これや水上の秩父

の山の眞清水の落ちくるならむ。



(筆重廣藤安) 川 田 隅

うち向ふ岸の榛原のみ、濃き墨が
きの如くなるが中に、柞の黄ばみた
るはさすがにほのかに見えて、その
ひまひまより、長き堤の見えわたる
に、堤のをちなる梢は、やうやうにう
す墨もてかきけちたらむ如く、いと
しもはるけきは、ただなびかぬ烟と
のみぞ見ゆる。ここかしこより、鳥の
飛びゆきつつ、ねぐらの鷺のつばさ
重げにおき出でて、川の瀬の眞菰に
おり立てば、みさごの群れ來て水の面に浮べるもをかし。上つ瀬

より筏師の蓑笠著て、棹を筏の上に横たへ、おのれたむだきて、思ふことなげにて居り、筏は水のまにまに流れ行くも静けし。渡し守舟さし出せば、大笠かたぶけて渡り行く人の、やがて堤をあるくさまも繪によく似たり。

すべてひと日のうちに、筑波嶺より吹きおろすかと思へば、沖よりも風かよひ来て、岸の木立も、長き堤も、あるは顯れ、あるは隠れて、かぎりなき青海原にむかひたらむやうにおほゆる折もありけり。

かくてやや夕ぐれ近くなりゆけば、むら鳥のおのがじし時もとむるに、雁の一つら二つら渡り行くなど、えもいはむかたなし。暮れはてても、なほ行く水の色のみ遠白く残りて、川ぞひ小田にいはへるみくまりの神の御火の、海人のいさりともしふべく、か

筑波嶺 茨城縣の中
央部に聳える名
山。海拔は八七六
米に過ぎないが、
關東平野の中に特
立してゐて遠くか
らも望まれ、又眺
望もよい。

すかに見えわたるもあはれなり。

秋ふけて小雨そほふる隅田川たが墨がきのすさびなる
らむ

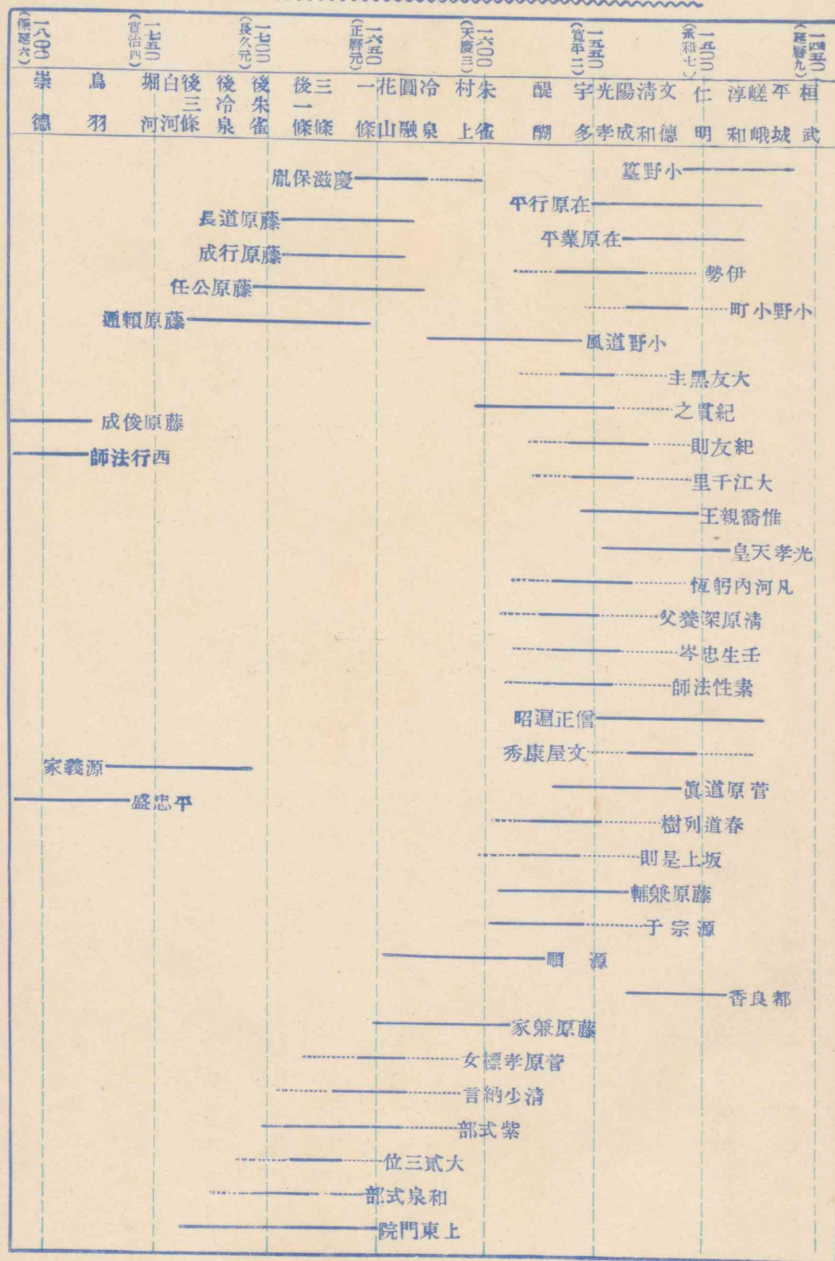
「うけらが花」



（筆琳光形尾）リ下東の平業

選文古中

中古の文學年表



○ 中古の文學

芳賀 矢一

芳賀矢一 國文學者。文學博士。福井縣の人。東京帝國大學文科大學國文學科出身。同大學教授、後に國學院大學長。昭和二年歿、年六十一。

平安朝時代は、支那文化の影響の次第にわが文化と融合したる時代にして、わが國特有の文化も亦次第に發展の氣運を見たる時代なりとす。いはゆる和魂漢才の語は、實にこの時代の造語なりしなり。就中、文學の上に最大の關係を有するは假名文字の製作なり。

假名文字を以て一般に國語を寫すに至りしは、文徳清和以後にあらむか。韻文としての和歌、散文としての物語は、相前後して著しき發達をなし平安朝の文學界を燦爛たらしめたり。而して、和歌の發達と、これに對する翫賞とは、あらゆる文學の根柢をなせるが如し。

延喜の朝はじめて和歌勅撰集の舉あり、これを「古今和歌集」とす。古今和歌集は「萬葉集」以後の短歌を集め、なほ當時の歌人の篇什を收む。「萬葉集」の歌には直覺の情を歌ひ、眼前の景色を敍べたるもの多し。「古今和歌集」のは

文徳、第五十五代の天皇。在位九年。(一五〇—一五八)

清和、第五十六代の天皇。在位十九年。(一五八—一五五)

延喜、第六十代醍醐天皇の御代の年號。(一五八—一五八)

俯仰感懷、人生の無常を敍べ、浮世の夢の如きを説く。三十一文字の歌體として頗る豊富なる内容を收め得たりと言はざるべからず。萬葉集は概して抒情の歌に富み、古今和歌集は理窟の歌に富む。修辭の法も、古今和歌集に至りては進歩著しく、譬喩縁語懸詞など、最も巧妙に使用せられたり。奈良朝と平安朝との言語の相違は、又その歌調の相違を感ぜしむること尠なからず。萬葉集は初心なる趣ありて、簡古の味に富み、古今和歌集は巧緻の境に進みて、勁健の趣なし。然り而して、自然と人生との融合はこの時代に至りて全く完成し、春花秋葉の美、歌に詠すべき題目は、多くこの時代に決定せられ、春の鶯、夏の時鳥、秋の蟲の音、鹿の聲、四時の景物に伴なふ禽獸もまた自ら一定し、春の花の盛りには人生の樂しき朝を思ひ、萩の上の露にははかなく消ゆる死の夕べを悲しむ。和歌の約束悉くここに成立して、後の文學は皆これに則るに至れり。

「古今和歌集」に次ぎての撰集は、後撰和歌集にして、遺れるを拾へるものに「拾遺和歌集」あり。相並びて三代集と稱す。

紀貫之は國文を以て始めて日記を記し、「大堰河行幸和歌序」を記し、「古今和歌集」の序文を作れり。かくの如きは、即ち假名文をして漢文と併行せしむる新例を開きたるものにして、貫之が功勞・識見は實にこの點に存す。

「伊勢物語」は和歌に就きての傳説集なり。在五中將の初冠より書きおこして、その今はの時の歌を以て筆を擱む。すべて歌を主として、その由來境遇を敍せるものなり。書中の「昔男」はすべて業平の事と了解せられ、卷中の歌は悉くその歌と見做されたり。然れども、篇中の歌は「萬葉集」「古今六帖」新撰萬葉集」中に見ゆるもの尠なからず。或は多少その句を變更したるものあり、業平以後の作者の歌もまた加はれり。要するに、人口に膾炙せる古今の名歌を基礎として、その歌の由來を説き、これに情話を附加したるものなり。

「伊勢物語」の後に「大和物語」あり。同じく歌物語にして、當時の名歌に關す

紀貫之 本卷一二一
頁參照。

伊勢物語 著者未詳。
在五中將 在原業平。

大和物語 著者未詳。

る説話を收め、又廣く古代の和歌傳説を収録せり。その「伊勢物語」と相並びて後の歌人に尊崇せられたるは故ありといふべし。

歌物語は歌を主とす。もし一身のその種種の境遇を記述すれば、則ち日記となり、もしその種種の境遇を總合して脚色を加ふれば、則ち物語となる。この種の日記の最も古きを「蜻蛉日記」とす。日記といふ名の下には、これより先に「土佐日記」あれども、こは紀行文なり。紀行文の日記もまた歌を主とせることなほ歌物語の性質を失はずと雖も、女流日記の如く、女子の生活を書きたるものにあらず。「和泉式部日記」はこれと比較すれば、文辭も整はざるのみならず、輕佻浮華の本性はよくその筆端にあらはれたり。紫式部日記にも抒情の文多けれども、人事の筆を交へたるところ尠なからず。和泉式部の日記の上流社會の人の妻として家庭の様を寫せるに反し、こは高家の召使として宮仕のさまを寫せり。前者が自己の情緒のみを筆述せるに對し、これは主人家の榮華めでたきさまを寫せり。

蜻蛉日記 藤原兼家の妻の著。
土佐日記 紀貫之の著。

竹取物語 著者未詳。
うつぼ物語 著者未詳。

落窪物語 著者未詳。

物語の祖と稱せらるる「竹取物語」は、月中女子の傳説を骨子として、後の物語類とはその性質を異にす。「うつぼ物語」の主人公仲忠の祖父俊蔭の事を敘するや、又印度の宗教傳説によりて奇怪不可思議の談多く、仲忠の生立尋常ならざれども、以下は通常の摺紳貴女等の物語となり、了れり。「源氏物語」以前の物語としては、恐らく最も大部なるものなりしならむ。その他の小物語に至りては實に多數なりしなるべけれども、今傳はれるもの尠なし。「落窪物語」もまた「源氏物語」以前の作にして、繼子傳説を骨子とす。かくの如き物語冊子の流行につれて、「源氏物語」は成れり。「源氏物語」は此等の物語を大成したるものと言ふべく、平安朝物語の白眉として、この時代の代表的傑作と見做すを得べし。

「源氏物語」は紫式部の著前後五十四帖前半は光源氏を主人公とし、後半の十帖は薫大將を主人公とす。卷數を以ても平安朝第一の大作たるのみならず、全篇貫通の脚色整然として紊れず、主人公を圍繞せる各種の女性

の性格も明瞭に發揮せられ、局面の變化もまた頗る多し。平安朝時代の物語は宮廷を以て中心とす。源氏物語は實に平安朝の上流社會の心情を映寫し、艷美の筆、能く宮廷を圍繞せる貴紳生活の面影を傳へたり。大體に於て現實的にして、傳奇的ならず。うづぼ物語に比すれば、概して、一層現實的となり、ただ佛教の因果の理を認めたるのみ。源氏物語の大作たる所以は、その人物の描寫に於けると同じく、その自然を描ける文辭の絢爛精妙なる點に在り。人事の描寫の後には必ず自然の背景を添ふ。上古以來、人事と自然とを融合せる詩的思想は、ここに至りて最大の發達をなせるなり。その半面は和歌の趣味にして、地の文には必ず歌の景情を含めり。源氏物語は即ち和歌の最も大いなるものなり。後世の歌人が源氏物語を以て歌人必讀の書となししも、眞に故なきにあらず。

「源氏物語」の後に「狭衣物語」あり。なほこの外に「更科日記」の著者、菅原孝標たかすゑの女の作といへる。濱松中納言物語及び藤原兼輔の作なりと稱せらるる

狭衣物語 世に大貳三位と稱せられた藤原賢子の著。

菅原孝標 文章博士。正曆(二六〇—二六四)頃の人。

藤原兼輔 從三位中納言に敘任された人。承平三年(二五九)歿、年五十七。

上東門院 一條天皇の中宮。攝政藤原道長の女彰子。定子 一條天皇の皇后。關白藤原道隆の女定子。

「堤中納言物語」あり。作者に就いては皆疑ふべし。文辭脚色ともに「源氏物語」に及ぶこと能はず。

「源氏物語」と相並びて國文の雙璧と稱へらるるものは清少納言の「枕草子」なり。清少納言は紫式部と時代を同じうし、紫式部が中宮の上東門院に仕へたる時、皇后定子の方に仕へ、その寵遇を蒙りたり。「枕草子」はその宮仕の時の見聞を記し、又種種の自然及び人事に關する觀察を敘せるもの。著眼奇警にして、文章才氣に富むこと、その人物を想見すべきものあり。然れども、これまた和歌との關係を離れず。平安朝の物語、日記を以て歌物語の發達と言はば、この隨筆も同じく和歌と密接の關係あるものと言ふべし。その宮廷の事實を敘するや、なほ日記と等しきものあるは姑く言はず、自然界に對する著眼もまた歌人としての著眼なり。春秋の景色、草木、鳥獸に至るまで、和歌の題目に入るものを擧げて、これを類從せしなり。山河を始め、地名物名は、多く和歌によりてその興味を聯想し來るものを擧げ、又そ

の名稱の詩的なるもの、即ち歌に入るべきものを擧げ來つて、その愛すべきを言へるは、全く歌人として天地萬物を見たるなり。美しきもの、悲しきもの、恐しきものなど、抽象的題目の下に、自然界のみならず、併せて人事界の各種の境遇を列擧せるも、歌の題として、いづれの方面にも著眼したればなり。枕草子の妙はその隨筆たる點に在り。忽にして人事、忽にして自然、或は公事を評し、或は人物を論じ、或は自己を誇り、或は皇后を褒む。その變化、その錯綜、ここに始めて全篇の妙味を成し來る。一篇の文章の妙味もまた句法の錯綜にあり。或は長句、或は短句、忽にして花に及び、忽にして小兒に移り、更に草花を點じ來り、再び人事に返り、忽にして今、忽にして昔、時と場處とを右往左往し、天地間の萬物、人事と自然とを問はず、種種雜多に、想像の及ぶ限り捕捉し來る。その變化轉變の妙、即ち人を魅するに足るなり。或事柄に執著固定せずして一時に多方面の興味を惹起すの妙機を捕へ得たる所以は、即ちその文の輕妙、酒脱の風を帶ぶる所以なり。この點に於

て、後世の俳家に似たるところあり。頓才機智を悦ぶは、當時の和歌の贈答に於ける特徴として、歌人の最も苦心せるところなり。清少納言は才氣奔放、當意即妙の才に富めり。その性質、最も能くこれに適したるなり。語を換へて言へば、直にその時代の性格を代表する人物なりしなり。

平安朝時代初期の歌物語、一變して小説的物語となり、日記となり、再變して歴史物語を生ぜり。歴史物語としては、即ち「榮華物語」と「大鏡」とあり。榮華物語は全篇四十帖、村上天皇の月の宴に始まりて、紫野の卷に終るといへども、要は關白藤原道長が一生の榮華を敘せるものなり。「大鏡」の藤原氏の榮華を寫すことは、全く「榮華物語」に等し。しかも、雲林院の菩提講に來り合へる大宅世繼、夏山繁樹の二人の老翁の談話としてこれを記し、間間傍聽者の意見を挿み、全體の構造の詩的なるは、文學的性質を有して、正史のこちこちしき處なし。折にふれたる和歌を収録して、飽くまでも物語たる性質を失はず。その文やや勁健にして、筆端褒貶の意を含めるは、思ふに男

榮華物語・大鏡 共に著者未詳。

村上天皇 第六十二代の天皇。在位二十二年。(KX—16)

藤原道長 一條・三條の兩朝に歷仕して攝政・關白・太政大臣となり、人臣の榮華を極めた。萬壽四年(天長七)歿、年六十一。

子の作なるべし。この二書は、平安朝時代の最後の文學として、藤原氏の最後の榮華を寫せるものなり。藤原氏の榮華は道長に至りて極まる。二書共に道長の盛世を寫すを主眼として、藤原氏の歴史を敘し來れるなり。

平安朝の世は、平安の都の今を盛りと榮えたる時にして、上流の紳士は、詩歌に、音樂に、舞蹈に、風流閑雅の技を弄べり。その東帶の裾を引きて頻繁なる年中行事に仕へし態や、如何に優美なりけむ。これらの面影は、各種物語の上に想見すべきなり。

一 あづま下り

一、みやこどり

昔、男ありけり。その男、身をやうなきものに思ひなして、京にはあらず、あづまの方に住むべきところもとめにとて行きけり。もとより友とする人、一人二人して行きけり。道知れる人もなくて、惑ひ行きけり。

三河の國八橋といふところに到りぬ。そこを八橋といひけるは、水の蜘蛛手に流れ分れて、橋を八つ渡せるによりてなむ八橋とはいひける。その澤のほとりの木の蔭におりみて、かれいひ食ひけり。その澤に燕子花いと面白く咲きたり。それを見て、ある人のいはく、「かきつばたといふ五文字を句の上に据ゑて、旅のここ

八橋 愛知縣碧海郡
知立町大字八橋に
遺址がある。

ろを詠め。といひければ、詠める。
からごろもきつつ馴れにしつましあればはるばる來ぬ
るたびをしぞ思ふ



八橋(尾形光琳筆) 八れば、みな人、かれいひの上、に涙おと、して、ほとびにけり。

宇津の山 静岡縣の安倍郡と志太郡との境にある山で、今では宇津谷峠と稱してゐる。すずろなるめ「おもひがけもない辛い目」の意。

行き行きて駿河の國に到りぬ。宇津の山に到りて、わが入らむとする路はいと暗う細きに、葛かづらは茂りて、ものこころほそく、すずろなるめを見ることと思ふに、修行者に逢ひたり。かかる

道にはいかでかおはする。といふに、見れば、見し人なりけり。みやこに、その人のもとにとて、ふみ書きてつく。

駿河なる宇津の山べのうつつにもゆめにも人に逢はぬ
なりけり

富士の山を見れば、さつきのとごもり、雪いと白う降り、
時しらぬ山はふじのね何時とてか鹿の子まだらに雪の
降るらむ

その山は、ここに譬へば、比叡の山をはたちばかり重ね上げたらむ程して、なりは鹽尻のやうになむありける。

なほ行き行きて、武藏の國と下總の國との中にいと大きな川あり。それを隅田川といふ。その川のほとりに群れゐて、思ひやれば、かぎりなく遠くも來にけるかな。とわびあへるに、渡し守は

ここ、京都附近をさしていふ。
鹽尻 海濱で鹽を製する時に、砂を潮水に浸して掻集めて、堆くしてあるものをいふ。

や舟に乗れ。日も暮れなむ。」といふに、乗りて渡らむとするに、みな人もわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さるをりしも、白き鳥の嘴はしと脚と赤き、鳴の大ききなる、水の上に遊びつつ魚いさなをくふ。京には見えぬ鳥なれば、みな人え知らず。渡し守に問ひければ、「これなむ都鳥。」といふを聞きて、

名にしおはばいざこととはむ都鳥わが思ふ人はありや
なしやと

と詠めりければ、舟こぞりて泣きにけり。

二、都の友へ

昔、男、東へ行きけるに、友だちどもに道よりいひおこせける。
忘るなよほどはくもゐになりぬとも空ゆく月のめぐり
あふまで

―著者未詳「伊勢物語」―

二宿の小松

紀貫之

紀貫之 歌人。又書をよくした。御書所預。大内記。土佐守。玄蕃頭。木工權頭に歴任。天慶九年(二六〇)歿。
十六日 承平五年(一〇五五)二月。
勾餅 餅菓子の名。あるじ「饗應」御馳走」などの意。

桂川 京都市の西部を流れる大堰川の下流で、賀茂川を合はせ、宇治川と合ひ、淀川となつて大阪灣に注ぐ。
飛鳥川 「古今集」詠人知らずの歌「世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日は瀬になる」

十六日。今日の夕つ方、京へのぼる序に見れば、山崎の店たななる小櫃こびの繪も、勾餅まがの法螺かたの形もかはらざりけり。賣る人の心をぞ知らぬとぞ言ふなる。かくて京へ行くに、鳥坂にて人あるじしたり。必ずしもあるまじきわざなり。立ちて行きし時よりは、來る時ぞ人はとかくありける。これにもそれにも返りごとす。

夜になして京には入らむと思へば、急ぎしもせぬ程に、月出でぬ。桂川、月の明きにぞ渡る。人人のいはく、「この川、飛鳥川にもあらねば、淵瀬更に變らざりけり。」といひて、ある人のよめる歌。
ひさかたの月に生ひたるかつら川、そこなる影もかはらざりけり。
又ある人のいへる。

天ぐものはるかなりつるかつら川そでをひでても渡りぬるかな

又ある人よめる。

かつら川わがころにも通はねどおなじ深さにながるべらなり

京の嬉しきあまりに、歌もあまりぞ多かる。夜更けて來れば、處も見えず。京に入りたちて嬉し。家に到りて門に入るに、月あかければ、いとよくありさま見ゆ。聞きしよりもまさりて、いふかひなくぞこぼれ破れたる。家を預けたりつる人の心も荒れたるなりけり。中垣こそあれ、一つ家のやうなれば、望みて預かれるなり。されば、たよりごとに、物も絶えず得させたり。こよひかかることと、聲高に物も言はせず。いとつらく見ゆれど、志をばせむとす。

さて、池めいてくぼまり、水づける處あり。ほとりに松もありき。五年六年のうち、千年や過ぎにけむ、かた枝はなくなりけり。今おひたるぞまじれる。大かた皆荒れにたれば、あはれとぞ人といふ。思ひ出でぬ事なく思ひ、戀しきがうちに、この家にて生れし女子も、もろともに歸らねば、いかがは悲しき。舟人も皆子抱きてのしる。かかるうちに、猶かなしみに堪へずして、ひそかに、心知れる人といへりける歌。

うまれしも歸らぬものをわが宿に小松のあるを見るがかなしさ

とぞいへる。猶あかずやありけむ、又かくなむ。

見し人を松のちとせに見ましかばとほく悲しきわかれせましや

「土佐日記」

清少納言 女流文學者。清原元輔の女。一條天皇の皇后に仕へた。

三 思ひよるまま

清少納言

一、四季

春は曙。やうやう白くなり行く山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。

夏は夜。月の頃は更なり、闇もなほ螢飛びちがひたる。雨などの降るさへをかし。

秋は夕暮。夕日はなやかにさして、山のはいと近くなりたるに、鳥のねどころへ行くとして、三つ四つ二つなど飛びゆくさへあはれなり。まいて、雁などのつらねたるが、いとちひさく見ゆる、いとをかし。日入りはてて、風の音、蟲の音など、いとあはれなり。

冬は朝。雪の降りたるは言ふべきにもあらず。霜などのいと白

き、又さらでもいと寒き。火など急ぎおこして、炭もて渡るもいとつきづきし。晝になりて、ぬるくゆるびもて行けば、炭櫃火桶の火も白き灰がちになりぬるはわろし。

二、にくきもの

いそぐことあるをりに長ごとするまらうど。あなづらはしき人ならば、のちになど言ひても追ひやりつべけれども、さすがに心はづかしき人、いとにくし。

硯に髪の入りにて磨られたる、また墨の中に石こもりて、ぎしぎしときしみたる。

物羨みし、身の上なげき、人の上いひ、つゆばかりの事もゆかしがり聞かまほしがりて、え知らぬをばゑんじそしり、又僅に聞きわたる事をば、われもとより知りたる事のやうに、こと人に語る

も、いとにくし。

物聞かむと思ふ程に泣くちご。鳥の集まりて飛びちがひ鳴きたる。ねぶたしと思ひて臥したるに、蚊の細聲に名のりて、顔のもとに飛びありく、羽風さへ身の程にあるこそいとにくけれ。きしめく車に乗りてありくもの、耳も利かぬにやあらむといとにくし。物語などするに、差出でて、われ一人さかしがるもの。すべて差出では、わらはもおとなもいとにくし。昔物語などするに、わが知りたりけるは、ふと出でて言ひくたしなどする、いとにくし。

あからさまに來たる子どもわらはべをらうたがりて、をかしき物など取らするに、馴れて常に來て居入りて、調度など打散らしぬる、にくし。

三、うつくしきもの

あまにそぎ「あまそぎ」にすること。
「あまそぎ」とは、古、童女の髪を肩の邊で切揃へたことをいふ。

瓜に描きたる兒の顔。雀の子の、ねずなきするに躍りくる。またべになどつけて据ゑたれば、親雀の蟲なども來てくくむるも、いとらうたし。三つばかりなる兒の急ぎて這ひくる道に、いと小さき塵などのありけるを、目ざとに見つけて、いとをかしげなる指に捕へて、大人などに見せたる、いとうつくし。あまにそぎたる兒の、目に髪を被ひたるを、かきはやらで、うち傾きて物など見る、いとうつくし。をかしげなる兒の、あからさまに抱きてうつくしむ程に、かいつきて寝入りたるもらうたし。雛の調度、蓮の浮葉のいと小さきを、池より取上げて見る。葵の小さきもいとうつくし。何も何も、小さき物はいとうつくし。八つ九つ十ばかりなるをのこの、聲をさなげにて文讀みたる、いとうつくし。雛の雛の脚高に、白うをかしげに、衣みじかなるさまして、ひよひよとかしがまし

く啼きて、人のうしろに立ちてありくも、また親のもとに連れだ
ちありく、見るもうつくし。かりの子、舍利の壺、撫子の花。

四、文

めづらしと言ふべきことにはあらねど、文こそ猶めてたきも
のなれは、るかなる世界にある人の、いみじくおぼつかなく、如何
ならむと思ふに、文を見れば、只今さし向ひたるやうに覺ゆる、い
みじきことなりかし。わが思ふことを書きやりつれば、あしこま
でも行きつかざるらめど、こころゆく心地こそすれ。文といふこ
となからましかば、如何にいぶせく暮れふたがる心地せまし。よ
ろづのこと思ひ思ひて、その人のもとへとて、こまごまと書きて
置きつれば、おぼつかなさには慰む心地するに、まして返りごと見
つれば、命を延ぶべかめる、げにことわりにや。

「枕草子」

四 心 の 花

仁和の御門、光孝天

皇。仁和は光孝天
皇の御代の年號。

(五五五—五五八)

仁和の御門みこにおはしましける時人に若菜
たまひける御歌

君がため春の野に出でて若菜つむわがころもでに雪は降
りつつ

初瀬に詣づる毎に宿りける人の家に久しく宿
らで程へて後に到れりければかの家のあるじ
かく定かになむ宿りはあるといひ出して侍り
ければ其處にたてりける梅の花を折りて

紀貫之 既出。

紀 貫 之

人はいさ心も知らずふるさは花ぞむかしの香ににほひける

すかはらのあそん
秋かぜのふきあけ
にたてるしらきく
は花があらぬかな
みのよするか

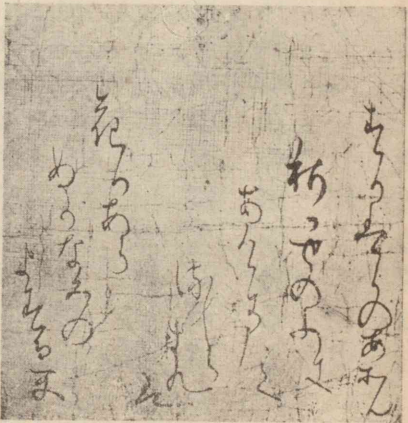
亭子院 宇多天皇。

伊勢 伊勢守藤原
繼蔭の女。

亭子院の歌合の時よ

める 伊勢

見る人もなき山里の櫻ばなほ
かの散りなむ後ぞ咲かまし



蹟筆之貫紀傳

櫻の花の散るをよめる

紀友則

ひさかたの光のどけき春の日にしづごころなく花の散るらむ

紀友則 歌人。土佐
佐藤・大内記に歴
任。「古今和歌集」
撰者の一人。

蓮の露を見てよめる

僧正遍昭

はちす葉のにごりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく

僧正遍昭 歌人。
俗名は良岑宗貞。
藏人頭。寛平二年
(一一五〇)寂、年七十
五。

月のおもしろかりける夜曉方によめる

清原深養父

夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月やどるらむ

清原深養父 歌人。
延喜・延長頃の人。

秋立つ日よめる

藤原敏行

秋きぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる

藤原敏行 歌人。
藏人頭・右兵衛督
等に歴任。延喜元
年(一一六一)歿。

是貞の親王 光孝天皇の第二皇子。

壬生忠岑 歌人。右衛門尉生・御厨子所預・攝津大目に歴任。古今和歌集」撰者の一人。

文屋康秀 歌人。清和・陽成の兩朝に仕へ、縫殿助に任ぜられた。

凡河内躬恒 歌人。古今和歌集」撰者の一人。

是貞の親王の家の歌合の歌
山里は秋こそ殊にわびしけれ鹿の鳴く音に目をさましつ

吹くからに秋の草木のしをるればむべやまかぜを嵐とい
ふらむ

白菊の花をよめる
凡河内躬恒
こころあてに折らばや折らむ初霜のおきまどはせる白菊
の花

滋賀の山 滋賀縣滋賀郡滋賀村の山嶺。

春道列樹 歌人。壹岐守に任ぜられた。

在原行平 因幡守・中納言・民部卿・陸奥出羽按察使等に歴任。寛平五年(一五三)歿。年七十六。
いなばの山 鳥取縣岩美郡宇倍野村にある稻葉山。

滋賀の山ごえにてよめる
春道列樹
山川に風のかけたるしがらみは流れもあへぬ紅葉なりけり

題しらず
在原行平
たちわかれいなばの山の嶺に生ふるまつとし聞かば今かへり來む

雪のふりけるを詠みける
清原深養父
冬ながら空より花のちりくるは雲のあなたは春にやあるらむ

「古今和歌集」

紫式部 式部丞藤原爲時之女。藤原宣孝の妻。上東門院に仕へ、博學で歌文の才に長けてゐた。

關吹きこゆる「續古今集」在原行平の歌「旅人のたもと涼しくなりにけり」
關吹きこゆる須磨の浦風」
御前「源氏物語」の主人公、光源氏の君の御前。

あいなう 何とも言ひやうなくの意。
げに如何に云云 以下二行餘は、光源氏の君が、その側仕の人の心情を思ひやるのである。

五 須磨の浦波

紫式部

須磨には、いとど心づくしの秋風に、海は少し遠けれど、行平中納言の「關吹きこゆる」といひけむ浦波、夜夜はげにいと近く聞えて、またなくあはれなるものは、かかる處の秋なりけり。御前にいと人少なにて、うちやすみ渡れるに、一人目をさまして、枕をそばだてて四方の嵐を聞き給ふに、波ただこもとに立ちくる心地して、涙落つとも覺えぬに、枕浮くばかりになりけり。琴を少しかきならし給へるが、われながらいとすごう聞ゆれば、人人おどろきて、めでたう覺ゆるに、忍ばれて、あいなう起きみつ、鼻を忍びやかにみ渡す。

げに如何に思ふらむ、わが身ひとつにより、親はらから、片時立

思ひ沈むさま 光源氏自身のふさいでゐる様子。

及ばぬ 筆も詞も及ばぬ。
なく「似るものなく」「類なく」などの意。

ゆゆしう 「なみなみならず」「通りでなく」などの意。

離れ難く、程につけつつ思ふらむ家を別れて、かく惑ひあへるとおぼすに、いみじくて、いとかく思ひ沈むさまを、心細しと思ふらむとおぼせば、晝は何くれとたはぶれごとうち宣ひまぎらはし、つれづれなるままに、いろいろの紙を繼ぎつつ手習をし給ひ、珍しきさまなる唐の綾などに、さまざまの繪どもを描きすさび給へる屏風の面どもなど、いとめてたく見どころあり。人人の語り聞えし海山の有様を、はるかにおぼし遣りしを、御目に近くては、げに及ばぬ磯のたたずまひ、になく描きあつめ給へり。

前栽の花いろいろ咲きみだれ、おもしろき夕暮に、海見やらるる廊に出て給ひて、たたずみ給ふ御さまの、ゆゆしうきよらなるに、ところがらはましてこの世のものとも見え給はず。白き綾の

なよよか「なよよ
か」に同じい。

ゆるらか「ゆるや
か」に同じい。

なよよかなる御衣、紫苑色などたてまつりて、濃やかなる御直衣
に、帯しどけなく、打亂れ給へる御さまにて、釋迦牟尼佛弟子」と名

のりて、ゆるらかに讀み給へるめで
たさ、また世に知らず聞ゆ。沖より舟
どもの謠ひののしりて、漕ぎゆくな
ども、ほのかに聞えて、ただ小さき鳥
の浮べると見やられるも、さまざま
心細げなるに、雁のつらねて啼く聲、
楫の音にまがへり。うちながめ給ひ
て、御涙ぞこぼるる。

繪挿の語物氏源入繪



三月の朔日に出で來たる巳の日、今日なむ、かくおぼすことあ

軟障 幕の如き物。

る人は襖みぞし給ふべき」と、なまさかしき人の聞ゆれば、海面もゆか
しくて出で給ふ。いとおろそかに軟障せじやうばかりを引きめぐらして、
この國に通ひける陰陽師召して、祓はらせさせ給ふ。海の面はうらう
らと凧たこぎわたりて、行くへも知らぬに、來し方ゆく先おぼし續け
られて、

八百よろづ神もあはれと思ふらむ犯せる罪のそれとな
ければ

と宣ふに、にはかに風吹きいでて、空もかき暮れぬ。御祓もしはて
ず立騒たふさぎたり。肱笠雨とか降りきて、いとあわただしければ、みな
歸り給ひなむとするに、笠も取りあへず、さる心もなきに、よろづ
吹散らし、またなき風なり。波いと嚴めしう立ちきて、人人の足も
空なり。海の面は衾ふとんを引張りたらむやうに光り満ちて、神鳴りひ

肱笠雨 俄雨。

はらめき落つ。ばらばらと強く雨の降りそそぐこと。

らめく。落ちかかる心地していといみじ。辛うじてたどり来て、ただかかる目は見ずもあるかな。風などは吹けど、氣色づきてこそあれ。あさましうめづらかなり。」と惑ふに、神なほやまず鳴りみちて、雨の脚あたるところ、徹りぬべくはらめき落つ。かくて世は盡きぬるにやと、心細く思ひ惑ふに、君はのどやかに經うち誦じておはす。

暮れぬれば神少し鳴りやみて、風ぞ夜も吹く。多く立てつる願の力なるべし。今しばしかくだにあらば、波に引かれて入りぬべかりけり。高潮といふものになむ、取りあへず人そこなはるるとは聞けど、いとかかる事はまだ知らず。」と言ひあへり。曉がた皆うち休みたり。君もいささか寝入り給ふ。

〔源氏物語〕

六 ぬれぎぬ

醍醐のみかど 第六十代。寛平九年(五五七)七月即位、延長八年(五九〇)九月崩御。壽四十六。時平 藤原氏。菅原 名は道真。

醍醐のみかどの御時、時平のおとど左大臣の位にて、年いと若くておはしき。菅原のおとどは右大臣の位にておはします。そのをり、みかど御年いと若くおはします。左右大臣に世の政を行ふべき宣旨下さしめ給へりしに、そのをり、左大臣御年二十八九ばかり、右大臣の御年五十五六ばかりにやおはしけむ、ともに世の政をうちせしめ給ひしほどに、右大臣はさえも世にすぐれ、めでたくおはしまし、御心おきてもことの外にかしこくおはしまし、左大臣は御年も若く、さえもことの外に劣り給へるによりて、右大臣御おぼえことの外におはしましたるに、左大臣やすからずおぼしたるほどに、さるべきにやおはしけむ、右大臣の御ために

昌泰四年 紀元一五六年。

善からぬこと出て来て、昌泰四年正月二十五日、太宰權帥になされて、流され給ふ。

このおとどの子ども數多おはせしに、女君だちは聳どりし、男君だちは皆ほどほどにつけて位どもおはせしを、それも皆かたがたに流され給ひて悲しきに、幼くおはしける男君女君だち、慕ひ泣きておはしければ、小さきはあへなむ」と、おほやけも許さしめ給ひしかば、ともにゐて下り給ひしぞかし。みかどの御おきて極めてあやにくにおはしませば、この御子どもを、同じ方にだに遣はさざりけり。かたがたにいと悲しく思し召して、御前の梅の花を御覽じて、

こち吹かばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春な
わすれそ

又、亭子のみかどに聞えさせ給ふ。

流れ行くわれは水屑となりはてぬ君しがらみとなりて
とどめよ

無き事により、かく罪せられ給ふを、からくおぼしなげきて、やがて山崎にて出家せしめ給ひてけり。そのほど極めて悲しきことおほかり。

日ごろ經て都遠くなるままに、あはれに心ぼそくおぼされて、君が住む宿の梢をゆくゆくも隠るるまでにかへり見し
はや

又、播磨の國におはしまし著きて、明石のうまやといふ處に、御宿りせしめ給ひて、うまやのをさのいみじう思へるけしきを御覽じて、作らせ給へるからうた、いと悲し。

亭子のみかど 第五
十九代宇多天皇。
承平元年(五九)崩
御、壽六十五。

驛長無驚時カレク變改スルヲ 一榮一落是春秋。

かくて筑紫におはしまし著きて、あはれに心細く思さるる夕べ、をちかたにところどころ煙の立つを御覽じて、

夕されば野にも山にも立つけぶりなげきよりこそ燃えまさりけれ

又、雲の浮きて漂ふを御覽じても、

山わかれ飛びゆく雲の歸り來るかげ見るときはなほ頼まれぬ

さりともと、世を思し召されけるなるべし。月のあかき夜、

海ならずただよふ水の底までも清きところは月ぞ照らさむ

これいとかしこくあそばしたりかし。げに、月日こそは照らし給

大貳 太宰府の次官。その居處とは太宰府をいふ。

白居易 支那唐代の詩人。號して樂天といふ。

はめとこそはあめれ。

筑紫におはしますところの御門おんかども固めておはします。大貳の居どころは遙かなれども、樓の上の瓦などの、心にもあらず御覽じ遣られけるに、又いと近く觀音寺といふ寺のありければ、鐘の響を聞き召して作らせ給へるからうたぞかし。

都府樓纔看瓦色、觀音寺只聽鐘聲。

これは、白居易の「遺愛寺、鐘、敲、枕、聽、香、爐、峯、雪、撥、簾、看」といふからうたにもまさざまに作らしめ給へりところ、昔の博士どもは申しけれ。

かの筑紫にて、九月十日、菊の花を御覽じける序に、まだ京におはしましし時、九月のこよひ、内裏にて菊の宴ありしに、このおとどの作らせ給へりけるからうたを、みかどかしこく感じ給ひて、

御衣たまはせ給へりしを、筑紫にもて下らしめ給へりければ、御覽ずるに、いとどそのをり思し召し出でて作らせ給ひける。

去年、今夜侍、清涼。

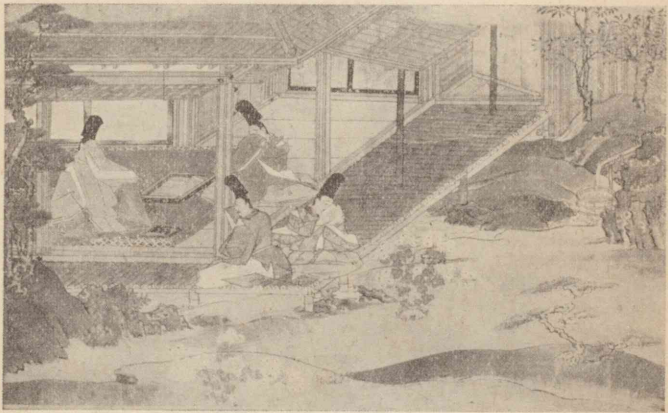
秋思、詩篇、獨、斷腸。

恩賜、御衣、今在、此。

捧持、毎日、拜、餘香。

このからうたいとかしこく、人人感じ申されき。

このことどもただ散り散りなるにもあらず、かの筑紫にて作り集めさせ給へりけるを書き集めて、一卷とせしめ給ひて、後集と名づ



(起縁神天崎松) 衣 御 の 賜 恩

後集「菅家後集」といふ。

けられたり。又をりをりの歌を書きおかせ給へりけるに、おのづから世に散りきこえしなり。又雨の降る日うちながめ給ひて、あめの下かわける程のなければや著てし濡れぎぬひるよしもなき

かくて、このおとどは筑紫におはしまして、延喜三年癸亥二月二十五日に失せ給ひしぞかし。御年五十九夜のうちに、この北野にそこらの松をおほさしめ給ひて渡り住み給ふをこそは、只今の北野の宮と申して、現人神あまひとがみにおはしますめれ。おほやけもみ行幸せしめ給ふ。いとかしこく崇め奉り給ふめり。筑紫のおはしましし處は、安樂寺といひて、おほやけより別當所司などなさせ給ひて、いとやむごとなし。

―著者未詳「大鏡」―

延喜三年 紀元一五三三年。

北野 京都市上京區馬喰町にある官幣中社北野神社の附近一帯の地。

安樂寺 今も太宰府町にある。

七朗詠

謝儼 支那時代の詩人。

祝

謝

儼

嘉辰令月歡無極。萬歲千秋樂未央。

長生殿裏春秋富。不老門前日月遲。

保胤

わかきみはちよに
やちよにさ、れい
しのはほとなり
てこけのむすまで

部一の「集詠朗漢和」
(蹟筆成行原藤傳)

仲算 高僧。安和二年(六三三)那智瀧の下で般若心經を講じたといふ。
都良香 文章博士。詩歌文章に巧であつた。承和・元慶の頃の人。

早春

都良香

よろづ世と三笠の山ぞよばふなる天が下こそたのしかるらし

仲算

氣霽風梳新柳髮。氷消浪洗舊苔鬚。

源正澄

たに風にとくるこほりのひまごとに打ちいづる波や春のはつはな

夏夜

白樂天

風吹枯木晴天雨。月照平砂夏夜霜。

紀貫之

夏の夜はふすかとすれどほととぎす啼く一こゑにあくるしののめ

秋月

保胤

郷淚數行征戍客。棹歌一曲釣漁翁。

後中書王

保胤 慶滋氏。文學を好み、菅原文時に學ぶ。長徳三年(六五七)歿。
後中書王 村上天皇の皇子、具平親王を申す。詩歌をよくし、兼明親王と並べて前後中書王といふ。寛弘六年(六八九)薨去。

世にふればもの思ふとしもなけれども月に幾たびながめ
しつらむ

權

白樂天

松樹千年終是朽。 槿花一日自爲榮。

道信

あさがほをなにはかなしと思ひけむ人をも花はさこそ見
るらめ

無常

白樂天

蝸牛角上爭何事。 石火光中寄此身。

良僧正

末の露もとのしづくや世の中のおくれさきだつためしな
るらむ

藤原公任撰「和漢朗詠集」

道信 藤原氏。左
中將。和歌に巧
あつた。正暦五年
(六五)歿。

良僧正 歌人遍昭。
良岑氏。既出。

藤原公任 詩歌音
樂の達人。仕へて
大納言に任ず。長
久二年(七)歿、
年七十六。

昭和六年九月十九日 發行
昭和七年二月二十三日 發行
昭和十年八月二十七日 訂正再版發行
昭和十一年九月十二日 訂正再版發行
昭和十一年十一月十五日 訂正三版發行

新撰國語讀本(昭和三年)

| 價 定 | |
|------|--------|
| 卷一、二 | 各金六拾五錢 |
| 卷三、四 | 各金六拾四錢 |
| 卷五、六 | 各金六拾錢 |
| 卷七、八 | 各金五拾八錢 |
| 卷九、十 | 各金五拾參錢 |

編者 佐々政一
補修者 武島又次
補修者 笹川敏
補修者 杉

發行者

東京市神田區錦町一丁目十六番地
株式會社 明治書院

印刷所

東京市神田區三崎町二丁目一番地
株式會社 明治書院
印刷者 細谷祐三

發行所

東京市神田區錦町一丁目
振替貯金口座東京四九九一番

株式會社 明治書院
電話神田(25)代表二一四七番(3)

不許複製

